求道

宮内省圖書寮

第參卷　第拾號

明治三十一年十二月二十六日　第三種郵便物認可

明治三十九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

求道第參卷第十號目次

◎理想と信仰　求道感謝
◎報恩講◎四海兄弟◎希有最勝人◎歳晩の感謝　講話
◎世諦即眞諦　聖傳　近角常觀
◎ヂヤータカ釋尊傳砂の道　告白
◎大悲の善巧　九茂むね子
◎身心脫落　藤澤乙夫
◎機關車上の感謝　講義　渡邊萬吉
◎歎異鈔第二章　歎咏　近角常觀
◎千葉の一夜《短歌》　左千夫
◎光《長詩》　甲之
◎深夜《長詩》　八風
◎すさび《短歌》　同
◎おり〳〵草《短歌》　紹介　志都兒
◎修養時感◎泡鳴詩集◎夢の華◎病間錄批評集◎世界的大競爭　時報
◎京都行◎求道學舍求道會講話題

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會
（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後六時
第三求道會
《日本橋區殼町說教所》

求道　第參卷第拾號

理想と信仰

現代思想界に於ける要求の中心とも言ふべきは理想といふことである。理想の家庭、理想の社會、理想の實行等すべて人生問題、社會問題を初めとして信仰問題に至るまで人は皆理想を追ふて之を要求しつゝある、之が今日の時代精神の眼目と見て差支がない。

此理想といふなかには自分自身にては其言葉の如く正しきやうに考へて居ても他より見て正しきと認められぬこともあり、また誰が見ても感ずべく正しきこともある。何れにもせよ今日の人の齊しく口にする理想なるものは各人が自分自身に於て標準を定めて之に達せんと切望し、奮鬪し、實現せんとあせりつゝある目當である。而して其之に達せんとするには自分自身の力を以て飽まで貫かんと欲するのである。奮鬪主義とか活動主義とか若くは自我實現主義とか名くるは皆此主義である、而して他の方面に煩悶し、懊惱し、失望落膽するが如きは其理想を追ひつゝあるに拘はらず自分自身の力を以て之に達することが出來ぬからである。何れにしても自分が定めたる理想に向て自分の力を以て達せんとして苦しみつゝある主義である。而して之が人生未覺の境界にして現時の人生問題若くは社會問題の凡てが此方針に向ひつゝあるは明らかなる事實である。

しかるに此思想は單に人生問題社會問題にのみ存するにあらずして道德の問題宗敎の問題にも同樣に行はれつゝあるのである。若し自分が理想的の道德を行はざるべからずとして自分の力で如何にあせりたりとて決して完全なる理想通りに行はれるものではない、我々が度々論ずる通り信仰なくして道德を全ふせんとするは不可能のことである。しからば宗敎問題にては此主義なるかと言ふに矢張同樣の誤に陷りつゝある、即ち吾人佛陀を慕ひ奉るものは忽ち佛陀を理想として進みがちになる、即ち大聖釋尊は其理想にして其大聖の道を辿らんとするのである、即ち聖道門と名くるのが是である。固より吾人佛陀を慕ひ奉るもの佛陀を理想とするは無理ならぬことなれども、吾人が自分自身の力によりて之を實現せんと試みる迚へに勢倒れざるを得ぬのである、即ち自力と貶せら

る丶所以である。

「慈悲に聖道淨土のかわりめあり、聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり、しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはまれなりがたし」自力無功を悟るは此一轉機である。法然聖人や親鸞聖人が聖道門を捨てるとか、難行道を擱くとか、自力を擲つとか、言はるゝのは正に此點である。全體大乘小乘とか、聖道淨土とか言ふことはもと〳〵佛陀に於て区區別をせられたのではない、聞くもの行するものに依りてかくの如く區別を生じたるものである。人生を捨てねば佛道に入ることが出來ぬ、されど佛道に入らば直に是れ人生の光たるべき筈である。しかるに人生己外に佛道を形作り、世間己外に枯木死灰の出世間を別立するやうになつたゆへ、之を小乘と名づけて世間即ち佛道たる大乘を說くに到つたのである、聖道門とて其說の如く行ふことを得るならば結構なれど之を理想として自力を以て實現せんと試みるゆへに遂に倒れざるを得ぬのである。

全体佛陀を理想とするものは佛陀を以て自己の標準とこそすれ、佛陀の力を認めぬのである、佛陀を理想として追ふて居る間は佛陀の救濟は受けられぬ。全体佛陀は衆生の目的となり、標準となるべく現はれたまひたのではない、佛陀は衆生の生死に迷ひ、懊惱に狂ひつゝあるを悲憫したまひて之を救濟すべくあらはれたまひたるのである。佛陀と言へば忽ち救濟は其中心となつてある、其救濟の根本は佛の大慈大悲の本願是である。故に佛陀を理想として進むべく自己の無能なることを認むると同時に佛陀の大慈大悲の救濟力を疑ふことは出來ぬ、此に於て聖道門自力已外に淨土門他力の救濟の門戸が開けたのである。

偖此の如き他力救濟の門戸が開けても、若し其の信仰を得ることを理想として追ふならば他力救濟を自力で求むることになる、親鸞聖人が他力中に自力ありと言はれたるは實に此点である。全体南無阿彌陀佛といふことは大慈大悲の無量壽佛に歸命することにて是即ち全く自己を投じ、佛陀の懷家を見出したる信念である。此の如く全く佛陀に信頼し得る所以のものは佛陀の大慈大悲の願力があるからである、我求めて而して自力を以て開き來るのではない、佛陀の大慈悲を以て攝取したまふからである。しかるに自力を捨て大悲攝取の救濟に與るべき吾々が自分自身の力を以て其救濟を得んと試みる、是他力の念佛、他力の信仰を自力を以て求めんと試

むるの誤に陷りたるものである。

信仰の問題は千古同樣である、現今青年の信仰問題に於ける最も多くある誤謬は信仰を得んものと之を理想として追ひ求め、知らず識らずの間に自力に陷ることである、信心歡喜の狀態に入りたいと苦しみ求むるも是である、又自分では喜ばれたつもりで、自分で其喜を失はざらんことを是恐れて、喜ばん〳〵と奮勵しつゝあるも亦是である。從て亦行爲の上にも同樣に理想を追ふて常に安んぜざる人がある。即ち理想的の行動が出來ぬと言ふて日夜悲み求めつゝある人もある。亦自分は佛陀にでもなりすましたる氣になつて、理想を實現すべく奮闘しつゝ、自力に陷りつゝあるを自覺せぬ人もある。之を要するに眞實の信仰は理想を追ふのではない、佛の大慈大悲に接觸したる一念に理想を實現し了したのである、而して此の人生が即ち佛陀の光明の到らざる隈なき理想國である。勿論理想の極致は極樂淨土にして此肉体を離れて初めて之に往生するなれど、そは時節の問題にして、其精神上に於ては、信仰の一念に實現し得たるのである、親鸞聖人が信仰の一念に於て即ち往生を得ると斷言せられたは、たしかに絕對他力の信仰の蘊奥を盡されたるのである。

親鸞聖人が定散自力の信仰と言はれたは即ち此理想の信仰である、定善は心中に佛を拜まん、淨土を見ん、たしかに攝みたい〳〵と心であせる信仰である、散善は理想的に行はん佛に近かん、罪を清めんと行爲の上であせる信仰である。定散自力の信仰などいへば、古のことの樣に思へども、現今青年の信仰問題に於て同樣の轍を踏みつゝある、頗る戒心すべきことである。眞實絕對の信仰は此理想を追ふ信仰倒れて自力の力味心をうちすて　唯一佛陀の大慈悲に感泣したる一念である、理想を追ふ信仰は寧ろ絕對眞實の信仰に入るべき道行として大抵の人が通るべき道條である。

かく言へば動もすれば他力とは逃る駄目であると失望落膽なげやりすることであると誤解するかもしれぬ、夫れは眞に誤解の甚だしきものである。世人他力を誤解して意氣地なしの如く考ふるは畢竟此點である、奮闘主義とか活動主義とか稱して他力主義を貶するは皆此誤解である、かの奮闘主義や活動主義で心ばかり猛りて實行の伴はぬのが、即ち失望落膽である、失望落膽は心ばかりで身の伴はぬ一種の奮闘主義活動主義である。他力とは決して失望落膽のなげやりではない、なげやりのあきらめ主義なれば他力ではない、無力である。

他力とは絶對の力を見出したのである、親鸞聖人が他力と言ふは如來の本願力也とは此絶對救濟の力を示されたものである。此の如き絶對の力を見出して歡喜愛樂の念に滿たさるるものは、どうして失望落膽のなげやり、あきらめ主義に陷らるべき筈がない、必ずや歡喜踊躍所謂天に躍り地に躍る底の絶對の信樂が溢れ出づる次第である。

此の如き信樂の一念の泉が湧き出でたる以上は必ずや念々刻々止むべきものではない、所謂自然と多念に及ぶ道理である。かくの如く一たび佛陀の慈悲を味へるものは遂に破壞すべからざる信心となるのである、故に之を金剛の信心と名くるのである。而して一たび此信に住せば元のありさまにならんと欲するもなり得べからざる故に不退轉に住すと言ふのである。かく絶對他力の信仰は喜はんと期せざるも喜ばざるを得ぬのである、其喜びの心より流れ出づる行爲なるゆへに理想的に奮鬪して行ふのではない、自然に感謝の心より動がざるを得ざる樣になるのである、此に於てや期せずして信力を以て理想の人生が實現さるゝに至るのである。嘗て自力を以て實現せんと試みて遂に倒れたる彼の理想の信仰理想の宗教理想の道德は他力に依りて滿足に實現せられたるのみならず、現時人生問題社會問題に於て切望されつゝある理想の家庭、理想の社會、理想の實行も皆如來本願の絶對他力により て無爲自然に實現せらるゝ次第である。

感謝

報恩講

十一月二十八日は親鸞聖人淨土に還歸したまひし聖日也、吾人年々歲々此聖日に遇ふ毎に森嚴崇重の感に撲たれずんばあらず、而して本年は緣ありて二十七日東京を出發し、二十八日朝京都に到着し、親しく眞影の御前に跪きて面り德音に接するの恩惠に浴せり、蓋し是れ近年稀有の事、冥々の間祖靈の誘引したまふによらずんばあらず、午後母君を奉して大谷の祖廟に詣し、松杉森々として香烟薫する處亡兒の遺骨を納むるの幸を得たり、嗚呼是れ聖人の遺骨を初めとして古今同信同朋の遺骨の集る所、我親も在せり、我友も在せり、乃至生々世々の父母兄弟も在せり、合掌禮拜謹みて經を誦するの間髣髴として聖人の遺靈に接するの想なくんばあらず、聖人臨末の御言に曰く、

我年極りて安養淨土に還歸すといへども和歌の浦の片雄波のよせかけ〳〵かへらんに同じ、一人して喜ばゞ二人とれ

もふべし、二人して喜ばゞ三人と倶もふべし其一人は親鸞なり

我なくと法は盡きまじ和歌の浦
　　青草人のあらんかぎりは

あはれ年々歲々よせかけ〳〵かへりたまふ聖人の御影向、坐ろに七百歲の昔にかへりて面り九十年の御苦勞を拜し奉る心地ぞする、如來大悲の恩德は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩德も、ほねをくだきても謝すべし。

四海兄弟

一遍の念佛も如來の御催あらずんば稱ふることあたはず、一句の法門も佛陀の御導きによらずんば說くことあたはず、さても〳〵たのもしきは同一念佛の兄弟四海に滿ちたまひ、如來の御同朋御同行到る處に待ち受けたまへることとなり、如來の敎法の下には宗派の異同なく、僧俗の區別なく、親疎を問はず、智愚を分たず、老若、男女、善惡、多少更に簡ぶ所なし、而して一見舊知の如く、一揖多年の親しみを感ず、是れ齊しく如來血緣の同胞たれば也、宜なる哉、經に曰く如來は一切の爲に常に慈父母と作りたまへり、當に知るべし諸の衆生は皆是如來の子也と。

希有最勝人

一日京都求道會に於て故黑田最勝君の爲に追悼會を修せらる、予其席に臨み肅みて靈前に經を誦し、和讃を諷して曰く

眞宗念佛きゝわつゝ、一念無疑なるをこそ、
希有最勝人とほめ、　正念を得とはさだめたれ。

回顧すれば一昨年春同君不可思議の宿緣によりて一日九段第二求道會に來り歔欷悲泣雨涙して忽ち希有の信仰に入りたまふ、自ら告白して曰く我年二十九、時も同じく春の候、實に聖人吉水入室の昔を偲ばずんばあるべからずと、同君の如きは洵に是れ、眞宗念佛きゝえつゝ一念無疑たりしもの、其名の如く希有最勝人にして眞個に正念を得たるものと謂つべし、而して催主は當年同日に黑田君と共に求道學舍に於て告白を爲せし無漏黑君及び同君と共に京都求道會を起して、冥々の間に黑田君の遺志を繼ぎたる掬月君なりき、吾人前記の和讃を題として法を說きたる時躍如として敬虔眞摯たりし君が面目現前せずんばあらず。

歳晩の感謝

乾坤納々として年將に暮れんとし、人事匆々として歳月云に窮る、一年の經過亦洵に容易なる哉、然れども首を回らして之を顧るに全國到る處幸に同信の行者漸く起り、都鄙伸れの所にも大悲の光明を仰ぐ、皆是れ大聖矜哀の善巧たらざるはなし、吾人倩々過去を憶ふに一として如來大悲の恩德たらざるはなし、嗚呼一年三百六十日悲めるあり、喜べるあり、笑へるあり、怒れるあり、醒め來れば是れ一場の夢、唯長へに顧へざるものは常照の光なる哉

煩惱にまなこさえられて。攝取の光明みざれども。

大悲ものうきことなくて。つねにわがみをてらすなり。

來らむ年は吾人益々大悲の恩德を仰ぎて明窓淨机の裡筆硯を清めて讀者諸君と共に盡十方無碍の光明を讃嘆し奉らん哉。

慈光はるかにかむらしめ、ひかりのいたるところには、

法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ、

表紙新裝既に成り、聖德太子の常に默念靜觀したまひし夢殿觀世音の靈像は武田學士の渝らざる厚意によりて恭しく畫かれたり。而して十一月晦日予が磯長太子廟下及び法隆寺の靈蹟に詣でたるの文を初めとして世諦即眞諦の本義を發揮して聖人が私淑したまひし和國教主の洪恩を感謝し奉らん哉。

講話

世諦即眞諦

（求道學會日曜講話）

近角常觀

今日の題は世諦即ち眞諦といふのであります。此諦といふ字は少々難かしい字ですが、まづ一言ていふと眞理といふ意味である。即ち世諦とは世間の眞理、眞諦といふのは眞實の眞理、即ち佛の眞面目、世間に對して出世間の眞實の有樣を申します。是は又眞諦俗諦ともいひ世間出世間ともいふて、佛教上廣く用ひられてあります、

今其眞俗二諦の關係をはなしてみたいとおもひます。眞宗にて云ふ處の眞俗二諦は、眞諦は安心立命をいひ俗諦は法律や世間の道德に隨ふて行くのを俗諦といひます。又眞諦門俗諦門といふ言葉もあり、眞宗に於ては此二つは車の兩輪、鳥の兩翼の如くで、是非に揃はねばならぬといふて居る。即ちたとへ安心立命しても又世間にかへりて世に從ふといふのが遵如上人以後の教へて、穩かに角たてず行つて、しかも心に安心を得てゐるのが佛法者の振舞としてある。しかし此眞諦俗諦の言葉は遵如上人以後に出來たのである。

偖私の話は結句は今の通りであるが、先づ其處に到るまでの道筋を委しく話しませう。廣き意味で此二諦をいふときは

世間、出世間とも、佛法世間ともいふてよろしい。今日の言葉では信仰と人生ともいふてよろしいのです。て先日發行した「人生と信仰」の文を引くるめて一言ていへば、つまり眞俗二諦となるのでず。

處で信仰問題の上に於て現今必要なるは何んであるか、人生の上に信仰を見る、世諦をはなれずに即今其上に眞諦の光を見るのであります。今日社會の人々即ち政治家にしろ實業家にしろ、宗教の考はなくしてたゞ世間の立場で世間を眺めてゐる。さうして其世間以上に偉大なる信仰の生活がある、出世間の安心立命の大なる光があるといふことは大抵の人はみてゐない、所謂世間的生活のそのまゝに終つてゐるのです。しからば、今日宗教とか信仰とかいふてゐる人は如何かといふに全く世間より遠ざかつて居つて、信仰安心の問題が世間の問題と別になり、世間は世間である、信仰はその上に、他に一つ修養をするのであるとおもふてる。故に信仰が人生と關係がなくなつて、殊更に世間をはなれて求めるといふ樣になつて居る、要するに眞諦と俗諦が別に切れてる樣におもはれます。

此事は筋を押して行くとどこまでも行く。如何にも信仰はかくの如くである、世間はかくの如くであると二筋に考へやすい。これが二つになつて居る間は眞の信仰問題はむつかしいのです。問題が大きくなりますが、抑大聖釋尊が法をとかれたはじめ、もし世間の道德或は學問で充分ならば、何ぞ出世間の教へをとかれませう。當時の印度の波羅門の考にせよ又當時の印度の社會の狀態にせよ、それで滿足出來るならば佛法は入らぬのです。又生老病死も氣にとめないで居られるなら、宗教は入らぬのです。然るに大聖釋尊が始めて佛法をとかれたといふは如何であらうか、如何にしても世間そのまゝの上に安心する事が出來なかつたから出家せられたのです。も一ついへば、世間の上に安心を持ち來つたのが出世間であります。世間に安んずる能はず、是を打やぶりて此處に出世間の大道が開けるのであります。人生は苦である、生老病死一切みな苦である、人世何の光もないと、我々は少しの光も人生上にみとめずして、たゞ苦の世界であるとおもふてゐるのであります。然し其苦しむ所以のものは、自分の煩惱の爲に世を苦しむてゐるのである。が、此人生の上に一度無明がなくなり煩惱が晴れゝば、直ちに人生其上に解脫涅槃の大平和が來るのです。一度無明の妄念が去れば、生は初めの生、老は始めの老、死は始めの死、信仰が來たとて生老病死はなくなるのではないが、其上に大平和の解脫涅槃、何等の苦もなき大平和の境が來るのであります。これが眞の眞諦の味はひであります。

我々ではわかりませんが、釋尊の教も人生の上に直ちに人生以上の光が來るのです。故に佛教の要點、信仰の要點、人生問題の極致は此苦しき人生をすぐに信仰を以て解決し、其上に眞理の光を見、其上に眞諦の光があらはれる點です。

抑釋尊を初めとして世々の祖師方の教も、みな世間の上にすぐさま、絶對の光があらはれてくることです。故に此眞諦が來つて眞の歡びが來たりた時、其歡こびは決して人世以外に存在するのではない。世間は世間で、先の如く風波はあれ

て居る、しかし大平和の境は其他にあるとおもうて居るのは間違です。生病老死の人生の上に始めは一切苦であるとおもうてゐた事が、何ど苦たらんと解脱して歡ぶ時、直ちに其世間の上に光があらはれてくる。是れ佛敎の根本義であります佛の敎はこゝであります。此世間をはなれて佛法あるにあらず、此世間の上に光がないのは眞諦ではない。

偖て此如く簡單にいふてしまへば何でもないが、さてこれがなか〳〵むづかしい。そこで一つ必要なことは、今眞諦世諦、世間、出世間と二つならべていへば、世諦世間がくだけてから眞諦、出世間があらはれてくる樣にれもふかもしれぬ。世そのもの丶上に出世間の味がくるのが、出世間て、世間と出世間とは區別して二つあるのでない。もし二つあるならば世間出世間とはいはぬ。又、眞諦俗諦もさうてす、俗は眞てないから俗なのてす、其俗諦が碎ければ眞諦てある、これが要點てあります。世諦の上に眞諦をくつけてかくのごとく思ひ考へたりなどしてゐるのてはだめです、信仰の味はわからぬ。

人生の苦樂種々である。其苦しみ、悲しみ、喜こびをみて其處に打捨て丶眞諦に行けるのならよろしい。しかし悲しい故に苦しい故にこゝに絶對の光を考へて、これて自分をなだめ、すがり、これを考へて悲しみをごまかすのならば、眞の光をみたとはいへぬ。これは、世間の上にかりに佛をくつつけたので眞の光で俗をやぶつたのではない。これては眞實の信仰はわからぬ。

一つわかりやすい例を出しませう。既にみなさんが新聞て御覽になつたらうとれもひますが、數月前短氣な下女が、殺すといふ氣なしについ誤つて隱居を打殺ろしたといふ事がありました。其女は遂に牢へ入れられました、實にあはれなことで、氣のみぢかい爲に誤て打つたのが原因て死んだものである。何卒御許し下さいと、何もしらぬものゆへたゞ頻りにあやまつて手をもんて哀をこひました。處が、昨日彼女に話しをしましたら、大變安心の樣子でした。私もおどろきまして聞いてみると、其女のいふには、たゞ自分の樣なものはいたしかたのないもので、佛にたゞたよらねばならぬといふ處へ氣がついたのです。此の十七日の晩にゆめの中に觀音樣があらはれて、お告げなさるには、れ前がいろ〳〵おもふても此の人生はあてにならぬ、たゞ佛を念ぜよといはれました。目をあけて大に感じまして、實に人生はあてにならぬとわからしていたゞき、たゞ念佛をしてゐるのてあります、と極めて簡單にいひました。私も彼のいふ事があまり立派すぎる故其佛は死んだ後は如何して下さるのか、ときゝました。彼女は茫然としてゐました。未來もよき樣に助けて下さるのだといひ聞かしましたら、大層よろこんて居ました。たつた一言人生はあてにならぬ、佛より外にないと氣がつく、夢の告は信仰の要點てはないけれども、其處に氣がつく動機です。世間が破れて出世間が來る有樣は此一例てわかります。世間て捨てられて初めて光がみえるのです。勿論此女はまだ、一審にもなりません故に、宣告をうけた爲に世を捨てたのではない考へた故に其處へ行けたのです、佛の御導によりてかく樂になれたのです。如何しても世間にすてられて出世間の花が開

く、從來の世間が破れて眞諦が來たるのです。處が、今日の人は、先づ世間に對する考があつて、其考を生かす爲に信仰を得樣として居る、これてはいけません。

唯世は眞實佛陀の惠み一つてある。是より他に一切のものはあてにならぬ、名譽、財產、位置、時間、此等は決して人間に力とはならぬ、力となるは佛の慈悲一つてあります。世に一點の未練がなくなつて、悉く眞實の絶對の佛陀の惠みの中に入らせてもらつた時、こゝが、出世間てあります、これが眞實の信仰てあります。サア佛敎としては此處は要點である。いろ〳〵宗派はあるが、みな一つてある。世間に一點の餘地なくなつて眞實にかへる、これ安心問題の極致てあります。

偖次にそれならばどうして此如くなれるか、そこて一寸考へやすいのは、世をすてなければならぬ、世をすて丶佛に歸せねばならぬ、と此考てあります。それ故漸々、佛敎發達と共に世を免れて山に入る、世の財產、名譽をすて丶剃髮して佛弟子となるといふ風の傾向が盛になつて、出世間の道が大に著るしくなつてきました。處てかうなつての考は世を捨て丶出世間になるといふのであるから、世をすて丶別に出世間の社會を作ることゝなります、つひ〳〵世間と出世間の二つに別れる樣になります。

是を一人の信仰上にあて丶考へてみますと、眞に佛陀のめぐみが戴ければ、我々はいかになるかといふに、人生悉くが佛陀の御惠みとなつて、眞諦の味は世諦と異なる處がないのであります。そこて先よりいふ如く世間を生かして眞諦に入らぬのもいかんが、さて眞諦に入つたものが再び世諦に出ることが出來ぬのもいかぬのであります。つまり人生のすべての問題を佛陀の光明て照していたゞくと、世間を外にして佛陀のめぐみがあらはれる處はないのてある。眞宗とは如何であるか、親鸞聖人のいはれるには、眞實とは佛陀の眞實てある、佛陀の眞隨てある。善導大師の御ことばでいへば「念佛成佛是眞宗」てあります。佛陀の御めぐみをよろこぶのが眞宗てあります。眞宗の眞實即ち佛の御めぐみは何の上によろこぶのであるか、我々が此腹を立て、慾痴をおもひ、欲を起す、其心の上に直ぐに佛陀のめぐみをよろこばせてもらうのであります。親鸞聖人の示したまふ眞實のめぐみは、此人生をはなれて他に味はふのてはありません、世間の上にも出世間の上にも、人生すべての上によろこびがあらはれて下さるのです。

今是を文について伺ふてみてもよろしい、信の卷に於て眞實の御釋のもとに善導大師の

「內外明闇を簡ばす、みな眞實を用ゐよ」

との御言葉がひいてあります。聖人は是を引いて宣はく、

「釋に不簡內外明闇といへり、內外といふは內は即ち是れ出世なり、外は即ち是世間なり、明闇といふは明は即ち是れ出世なり、闇は即ち是世間なり、又明は即ち智明なり、闇は即ち無明なり、涅槃經に曰く、闇は即ち是世間なり、明は即ち出世なり、闇は即ち無明なり、明は即ち智明なり、」

是親鸞聖人の眞實心の釋である。內は即ち出世、外は即ち世

間兩方に通じて眞實なる故であるといふのであります。何の點から伺かふても有りかたい、佛陀の廣大のめぐみ絶對のめぐみは、世間であらうが出世間であらうが、僧侶でも俗人でも、すべての上にひとしくうけるのであると、聖人はがくみられたのであります。即ち世を捨てゝ出世間に入らねばならぬといふてゐるが、さて盡十方無碍光如來の御めぐみは、我々の俗生活の上に宏大のめぐみをきかしてもらつて、我々の煩惱の上にも仕事をするにも何もかもの上に、遍くうけるめぐみであります。故に此眞實の御まことに氣がついたのが信仰であります。親鸞聖人のしめしたまふ佛陀のめぐみは今いふごとく世間の上にすぐあらはれるのであります。たゞ佛陀のめぐみに氣がつかしてもらひ、一所にすまはせてもらふて其めぐみを一代のみならず死後までもよろこぶことが、眞實の教であります。我々が腹を立てる、いろ〳〵愚痴をおもふみな佛陀のめぐみに氣がつかぬ故である。まよふべからざるものにまよひ、悲しむべからざるものに悲しみて居るのです、たゞ佛陀のめぐみをきくのが一番大きいのです。其めぐみはなにも人生をはなれてきくのではない、なるほど、世をすてゝよろこびに入るのであるが、自分がすてねばならぬとすてゝ行くのではない、佛陀のめぐみをきかしてもらつて、夢のさむる如く今迄の迷を自覺するのです。親鸞聖人九十年の一代とかれたのは此めぐみをとかれたのである、其絶對の光をとかれたのである、これが眞宗眞諦の極致である。

故に若し人が此のめぐみに氣がつかず所謂世間的にいろ〳〵人生に苦しむのは、此めぐみの光に行く道行たるにすぎぬ。一度このめぐみに入れば、(否入ればでない、昔より廣大なめぐみの中にゐるのをしらずに居るのです) 何の苦もない。聖人は法然上人の御言葉をきいて、直ちにあゝ氣がつかなんだと助かる一つであつたのです。其めぐみは何等の罪さはりがあつても一つとして照らさないといふ處はない、つまり佛陀のめぐみに氣がつかぬゆゑに、いろ〳〵まよふのである。もし今迄に此めぐみに氣づいてゐるならば、決してまよひも苦しみもなかつたのである、否たゞに迷くるしみのみならず、自分でよい事ができるなどゝはおもふことないのである。此御めぐみがわかればつみの身にて出世間に入らねばならぬ、自分を清めねばならぬとすることはないのである。たゞ佛陀の宏大のめぐみに氣がつけば、いかにしたとて、人間の力で行ける筈はないと、佛の宏大のめぐみの上にやすんずる他はない。佛のめぐみは內外明闇を簡ばず、其御めぐみをよろこぶには世間にゐるのも餘義ない、しからば、又欲をすて身を清からしむるのもよろしい、そんなことにかゝわらずたゞ仰くべきは佛陀のみである。是をよろこばしてもらふのが眞宗のよろこびである。其の廣大の光にむかつて、自分は煩惱があるから、おがむこと出來ない、といふは甚だしきまちがひである。世にくるしみいろ〳〵するものゝために拜める樣に佛陀の御慈悲があつて下さるのです。自分は罪深いと頻りに出世間にしなくてはならぬといふてゐる、大變一寸きくと謙遜の樣であるが、自分でものになる氣持でゐる。さうではない、絶對のめぐみは、誓願不思議、名號不思議、佛のめぐみをうけるゆゑに自分が清まらねばならぬのではない、

過去の宿業ゆゑ千人殺せといはれたとて殺すことも出來ぬかはりに、又百人千人を何時ころすかもしれぬ。たゞ我がはからひをすてゝ佛陀のめぐみをよろこばせてもらふ一つ。これが何よりありがたい。選擇本願念佛集南无阿彌陀佛、往生之業念佛爲本、法然上人一代の御教化は、此南无阿彌陀佛の其佛をしらす御教化であります。聖覺法印はのたまはく

誠にしんぬ無明長夜の大燈炬あり、
何ぞ智眼の暗きを悲しまん、
生死大海の大船筏なり、
豈業障の重きを煩はんや、

世に佛陀のおはすのは無明長夜の燈火である、生死大海の船筏である、其佛のめぐみが我々の船である罪ありとてなげくでない。和讃にのたまはゝ

無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、
生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ、

實に我々は凡夫である。一歩も動けぬ罪惡の身であるけれども、頼むは廣大の佛の御めぐみあり、此めぐみ、此御慈悲これ人生の光である。聖人御一代の教も此彌陀の本願、名號、是一つが人生の力なることを教へて下されたのである。過日來しば〳〵申しますが、聖人の一代の歎びはいかに仰せられるか、聖人が日野左衛門の門前に雪の一夜を明かされたときの御言葉に、

「彌陀の五劫思惟の本願をよく〳〵案ずれば、偏に親鸞一人が爲なりけり、されば そくばく業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたる本願のかたじけなさよ」

とたゞ聖人の眼にみゆるは佛の御慈悲一つである。

なほ此處を、も少しいへばよくわかります。

「今また案ずるに、善導の自身は是れ現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言に少しもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなくも我が御身に引かけて、我等が身の罪惡の深きことをもしらず、(自分が清淨にするとおもふのは、自身の罪惡のいか程深いかをしらぬのです)、如來の御恩の深きことをもしらずして、迷へるを思ひしらせんがためにてさふらひけり、まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともよくあしといふことをのみまうしあへり、聖人の仰せには善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり、其の故は如來の御心によしとおぼしめすほどにしりとぼしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとぼしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、(これは俗諦ゆゑいかぬ、これは出世間だからよい、これは道德ゆゑよい、これは不道德ゆゑいかぬ、これみなよしあしをいふのです。しかし眞の善は佛のよしとおぼしめすところ、眞の惡は佛のあしとしたまふところ)、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのことみなもつてそらごとたわごとまことあることなきに、(世間といふも出世間といふもみなそらごとたわごとです)、たゞ念佛のみぞまことにておわしますとこそ仰せはさふらひしか」

たゞ佛陀のみまことである。

世の中にこのまことを一ついたゞくのみ眞實である。又其一つをしらせんとしたまふばかりか佛のおぼしめしである。このめぐみのうちにわれ〳〵を追ひこめる爲に、いままでのいろ〳〵の經過があるのです。人生の目的はたゞ此信仰にいるこれ一つである。此信仰に入りてみれば世間の世諦がすべて此信仰のめぐみにいれる道行である。此廣大のめぐみに氣づく道筋である、其めぐみがわかれば、世のかなしみ、よろこび、すべてみなめぐみをよろこばせていたゞく道筋である。そも〳〵我々が信前といはず、信後といはず、何事も世間の有樣がみな佛のめぐみをしらさんとする御手まわしである。われわれは罪に泣き悲しむは皆自分の罪でなき悲しんでおるが、佛の御慈悲を藏だいて見れは、何事も佛陀のめぐみならぬはない。故に親鸞聖人の信仰の極致は日野左衛門の門前に於て雪中に埋もれながらいはれた御述懐の中にある。聖人の一代は此外ありませぬ。石を枕に雪を褥にしてゐらせられた其苦しい間に、佛樣の御すがたがあり〳〵とあらはれて下さいます。即ち其苦しみが佛陀の御恵みである。故に度々いふ觀經一部の悲劇も此佛の御恵みの外ではない。和讃にも

大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下の罪人を、
逆惡もらさぬ誓願に、　方便引入せしめけり。

もう提婆阿闍世の逆害それ自身か、既に大聖おの〳〵もろともにてあります。廣大なる佛の御めぐみによりて、めぐみのうちに引込んで下さる道行である、逆害そのまゝが佛の御めぐみをしらせる御手廻しである。かくの如くなれば、何をみても佛の御めぐみの外はない。親鸞聖人の御流罪の時、

「衆生臣下法にそむき、義に違し、怒を爲し仇を結ぶ」

念佛の一派をば種々と迫害したその樣な大事件も、聖人はのたまはく、

大師聖人若し流刑に處せられたまはずば、我亦配所に趣むかんや、我若し配所に趣むかずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是な性師敎の恩致なり、

聖人が三十五才まで京都に居られた其儘ならば、或は聖人九十年の一生涯の美しきことはなかつたかもしれぬ。越後、常陸、關東等の御苦勞があつて、傳道の出來たのは、みな流罪の御蔭で、皆師敎の御恩であります。かくの如く聖人のいたゝかれた味をみると、一つとして眞諦以外にありません、世の淺ましければ淺ましき上に佛のめぐみをよろこばれて居られる。

悲しい哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、生死の大山に迷惑す、

罪深く業深き此親鸞であると、其上に直ちに廣大佛陀のめぐみをよろこばれたのである。かくなれば何事がめぐみならざらん、聖人は決して世間の生活と出世間の生活と別にしては居られぬ。僧かとおもへば俗であり、俗とれもへば僧である

親鸞僧の義をあらためて俗名を賜ふ、因つて僧に非らず、俗に非ず、然る間禿の字を以て姓となす。

淺ましき世俗の姿の其まゝて佛陀のめぐみを喜ころんて居られるのです。歎異鈔に宣はく、

海河にあみをひき、つりをして、世をわたるものも、野

山にしゝをかり鳥をとりていのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畑をつくりてすぐるひとも、たゞれなじことなり、と

極端にいへば獵、漁業すとも其上に廣大のめぐみをよろこびつゝ日送りをするが、めぐみに氣附いた所詮であります。聖人は大勢至菩薩法然上人のめぐみて念佛の一法をとり、又觀音聖德太子の導きて彌陀の本願にあはせてもらふ、一つとして佛のおめぐみならざるものはない、此他はない、即ち聖人の眞宗は世諦即ち眞諦である。

動もすると此處が取違へられて、世諦即眞諦をは又世の有樣にしたがつて、眞實をまげるのであるとすると大變な間違である。それならば外儀は佛法のすがたにて內心外道に歸敬せるものである。佛のめぐみに氣がつけば、なにも意識的におもひ出さずとも、しらず〳〵の間に御めぐみによりて人生一つとして不足な事はなくなる。此人生五十年、百年の一生涯が、唯此佛の慈悲である。

佛の大悲の眞實より我々をめぐんて下さるによりて、我々もこの樣な歡こびを得る身となれるのです、其眞如一實法性の境より我々をすくひあげ、我々をめぐんて下さるが、佛のすがたである。五刼思惟の本願をおもふと人生何程くるしくとも苦しいなどゝはおもへぬ。飽迄罪深く、飽まで横着の我々、唯懺悔の外ありません。しかし　其廣大のめぐみに引入れるため、十方三世の諸佛諸菩薩、乃至人生の上にあらはれて種々のすがたを以て我々を濟度して下さつた法然、親鸞等の方々が、私を引入れて下さつたのです。此めぐみに對して自分がわるいの、どうのかうのとよろこびかなしびのは勿体ない事です。たゞ此の佛の御まことに感泣するの他ありません。此佛の御まことをしへたのが、淨土眞宗といふのです、それをよろこぶのが俗諦即ち眞諦である。實にこの樣な深い慈悲をうけて居る以上は、其御恩に對しては身を碎き粉にしても報じねばなりませぬ。

如來大悲の恩德は、身を粉にしても報ずべし、
師主智識の恩德も、骨を碎きても謝すべし。

聖人が越後の雪中でくるしまれた時にも、其苦を苦とせずして御恩を感謝せられた、その上に阿彌陀如來の御姿をあらはせられてある。又我々が此めぐみをよろこぶ上より働らかせてもらふならば、惡多けれども其上に佛法の味があらはれて下さるのである。かくの如く人生の上に佛法を味はゝせていたゞくのゆゑに、世諦即ち眞諦であります。邁如上人が「表に王法を本とし內心に佛法をたくはへよ」といふは、此日常生活の味をわかりやすくさとされたのである、決して眞諦世諦は別々に兩立するものでない。聖人の和讃にのたまはく

よしあしの文字もしらぬ人はみな、
まことのこゝろなりけるを、
善惡の字しりかほは、
おゝそらごとのかたちなり、
是非しらず、邪正もわかぬ此身なり、
小慈小悲もなけれども、
名利に人師をこのむなり、

かくの如く淺ましき身なれとも念佛一つで往生させてもらふ「念佛成佛是眞宗」であります。即ち聖人に到りてはじめて世諦即眞諦を我々日常の生活の上に味はふ樣にして下されたのは實にありがたいことである。

聖傳

ジアータカ釋尊傳

第一　砂の道

此說敎は大聖サーヴァッチに於ける間に說かれしものなり、何によりてかとかれし、すなはち、忍耐力なき比丘につきてなり。

我如此く聞きぬ。一時佛サーヴァッチに在せし時なりき。一人の善き家柄に生まれし若人ジエタヴァナに行きし時、師より說敎を聞きぬ。深き懺悔の心もて己の惡果の報ひ來らんをは恐れ、佛に歸依し奉れり。徒弟として彼は五ヶ年の月日を經たり、彼或は經典の二節を學び、自ら坐禪の練習に餘念なかりき。而して一日師より相應の考案を受け森に退ぞきぬ、其處に雨期を過し三ヶ月不斷に勉むれども內心に何等の實驗をも得ざりき。然る時におもへらく師は常にのたまへり、世には四種の人ありと、我は其最下に屬すべきなり、此生に於て我は道も果も共に得がたかるべし、森の生活も何にかせん、我は佛陀に至り、其光榮をながめ其快き音をきゝて暮さんとてジエタヴナにかへりぬ。

彼の友人等彼に曰はく「兄弟よ、汝は師より考案を受け汝自身を敎の寂靜の中に捧げんと我等をのこしたり。しかるに今汝はかへり來り、世俗の快樂にかへり來りぬ。汝はさらば出家捨門の最上の目的を達したるにや、汝は流轉輪廻の生死を逃れたりや、」と。

彼れ曰く「兄弟等よ、我は其より道も果も一として得しものあらず、結句我はかくの如き無益の人たりと失望して歸り來ぬ」と。

「汝誤まれり兄弟よ、確乎として移動したまわざる師の敎に歸依したてまつりし上に今其を捨つるは誤まれり。來れ、我等佛に告げまつらん」、とて彼を佛陀の御許に連れ行きぬ。

佛、彼を見給ひし時宣はく「我知る、おゝ比丘等よ汝等彼を其意に叛むきて我に連れ來りしことを、彼は如何なる事をかせし。」

「主よ、此兄弟は一度信仰を求めしにも係はらず、今遂に目的に進むを止めて我等にかへり來れり」

然る時、師彼に宣はく、「汝求むる心を捨てたるは誠なりや。」

「大聖よ、そは事實なり」と答へぬ。

「如何なりし、兄弟一度敎へに歸命したりし汝が今無欲にして足るを知り、世をふりすてゝ果に專ら勉むべき身とはならずして定見なき人となれりや。

いかに、先には汝道念堅固なりしにあらずや、骨ってたゞ忍耐によりて砂の荒野に水を得て人々、多くの牛等を救ひしことありき、今汝の志を捨てしは如何」と。

此等の數語により兄弟は決定心を得ぬ。

されど他のものは大聖を見上げ奉りて曰はく「主よ願はく

ば砂を穿ちて水を得し人の忍耐につきて語りたまはんことを、」と。

「聽け然らばォゝ比丘等よ」と、かく彼等の注意を呼び起して流轉生死の中に隱されたる一事を明らかにしたまへり。

* * *

昔ブラマダッタ、ベナレスを統御せし時の事なりき、菩薩は商人の家に生じたまひき。成長したるの後、彼は常に五百の車もて貿易しつゝありけり。

一日彼は二十リーグの直徑なる沙漠に來りたまへり。其沙漠の砂は甚だ美しくして拳の中に取る時は手に保ち難き程微細なりき、太陽昇る時は、炭の塊の如く熱して人其上を步み難し、然れば其を旅する人は薪水、油、米等を携へて夜中に過ぎるを常とせり、而して曉に至るや野營をして天遮を擴げ彼等の食事を取り、其影に坐して日中を過しぬ。日沒に及びて彼等は喫食せり、かくて、地冷かになるや否や隊伍を整へて出立せりき。旅は恰かも海を航するが如くなりき、所謂舵手ともいふべき人擇ばれぬ、彼は星の知識によりてよく隊商を案內して目的地に達せしめぬ。

我等の物語の場合に於て菩薩はかくの如きの沙漠を旅せりき、彼五十九リーグを旅せし後おもへらく、「我等は今一夜の後、砂地を出ずるを得べし」とて夕食の後彼はもたらす所の薪水等を悉く放棄せしめ車に牛をつけて出立しぬ。案內者、第一の車に褥を用意し臥しつゝ、星を眺めて人々に御すべき方向を命じつゝありき、されど長路の進行と休息の不足の爲に疲れを生じて眠りぬ。されば彼は牛の方向を失なひ、もとの道を彷徨するをもしらざりき。

牛は終夜進みぬ、曉、案內者目醒めて遙かに天上の星を眺め驚ろき立ちて曰く「車を止めよ、車を止めよ」と、日は彼等の恰かも止まりし時に明けぬ。人々はさけびて曰く「いかにこは我等の前夜止まりし處にあらずや、我等の薪も水もすべて失せぬ我等は失なへり」と、牛を解きはなして彼等の頭の上に天蓋をかけ、失望して車の下にたふれ臥しぬ。

されど菩薩は曰く、「もし我氣を失はゞすべて此等は死するならん」と朝まだ冷かなる時、あなたこなたに步みぬ、而してクサ草の株あるを見てれもへらく、

「此草は下より水を引きて成長せしものならん」と、彼は人々に鋤をもち來らしめ其場所を堀りぬ、六十キュビトの深さに至りしとき堀る人の鋤は岩にあたりぬ。其當るや人々大に落膽したり。

されど菩薩おもへらく「其岩の下に水なかるべからず」と井に下り行き岩の上に立ち其上に耳を當てゝ水音を聞きぬ。然るに彼は水の迸る音を聞きぬ。大に歡び堀る人を呼びて曰く「我子よ、若し汝今手を止むる時は我等みな死を免れず、汝失望する勿れ、此鐵の鎚を取りて井に下り岩によき一打を與ふべし」と。

若者は從ひぬ、多くは失望して立てども彼は大に決心して下に行き、石をうちぬ。岩は忽ち二つに割れ下に落ちぬ、まもなくして流れは溢れ出て、水は棕梠樹の高さに上りぬ、彼等はみな水を飲み、其中に浴しぬ、而して人々は彼等の車等を碎きて米を炊し、食事をし牛をも養なひぬ。日の西に沈む

や、彼等井の傍に旗を立てめさす處に着しぬ、其處に於て彼は商品を二倍の價に賣り、彼等の家に歸りぬ、而して幸福なる老年を終へたり、菩薩は贈物を人に與へなど其他よき行をなせり、而して彼の行に順してすき去りき。

* * *

佛此物語を終へたまひしとき、彼は佛陀として次の偈を宣まへり。

意志堅き人は沙地に穿つ
のむべき水をば其處にみるまで
賢こき人等は不斷のはげみ
遂には心に安きを得なり

彼かく說きさとしたまひ四眞諦を述べたまへり敎訓の終るや、心を失なひし出家は遂に阿羅漢果を得たり。

主此等の二つの物語を終へたまひしとき因緣をときて曰く、其時に失望せずして石を破り、衆人に水を與へし秘書官とは決定心なき兄弟是なり、他の人々は佛の從者たる衆僧なり、隊商の長とは我身是なりき。

信は道元功德の母なり、一切のもろ〳〵の善法を長發す、疑網を斷除して愛流ないでゝ退轉无上の道を開示せしむ、信は增滿なし心清淨にして懈慢を滅除す、恭敬の本なり、また法藏第一の寶とす、清淨の手として衆行をうく、信はよく惡施して心に惜むことなし、信はよく歡喜して佛法に入る、信はよく智功德を增長す。信はよくかならず如來地にいたる。【華嚴經】

告白

大悲の善巧

九茂むね

御緣と云ふは不思議なものでありまして、私が佛樣を信ずる樣になりました原因は、私の家代々眞宗で祖父母は殊に能く信心を頂いて居りましたからであります。次に誘因となりましたのは、自分か病氣に罹り三年間の煩悶でありました。最後に佛樣を信じて疑のなくなりましたは、私の夫の病氣の不治を豫期し、煩悶の極遂に近角先生の御敎示を頂いて御救ひに預りましたのであります。

私は幼少より祖母に連れられてよく御說敎を聽聞しましたが、學校敎育のために極樂とか地獄とかは全くないものといふ方を信して居りました。けれとも段々年を重ね物事か少しく分る樣になりましてから、祖父母の樣子を見まして少し心か傾きました。それでもまだ佛樣があるなどゝはどうしても思はれず、假りに拵しらへたものらしく思つて居りました。そこへ私は醫學を學びましたから尙更信じられぬ樣になりました。其後二十三四歲の頃修養の必要な事を思ひまして、宗敎を信して見たいと思ひ祖母へ話しましたら、大そう悅で菩提寺の御住職へ話して、婦人法話會の雜話を頂いて送て呉れました。けれども毎日業務に逐はれまして、殊に私は忙しい

生活を致して來ましたから、思はありましても全く暇がなく數年を過しました。

それ迄か實に御緣の深い事と思ひます。只今より九年前に獨りの子供が病氣に罹り、殆ど一年も煩つて居りました。其時に私の內心にはまだ佛樣がありませんから斯樣に思ひました、子供の時から祖母に能く聽きましたには、眞宗では只一心に阿彌陀樣御一佛のみ他の神佛は信するに及ばず、又神佛へ願ひ事などは決してすべき事でないから、如何なる時でも心を迷はすなと承つて居ました。私は祖母はあゝいふ樣に申しても、世間ではよく神樣へ祈誓をかけるが、若し神佛があるものとせば自分の生命に換へても願つて見たい、けれども其神佛がどうしてもあるとは思はれず、嘘なまなか物の理窟を聞きかぢつたから迷信も起らず、こふいふ時こそ却て迷信家になつた方が心が安まるであらうなどゝ思つた事がありました。翌年一月妹が十七歲で病死しました、私は生來虛弱で折々重い病氣に罹つた事がありますが、妹は健康でそれ迄は病氣をした事がなかつたのに、百方手を盡した甲斐がなく死にましたから非常に落膽しまして、初めて世の無常を味い憂鬱に暮して居りました。

私の家庭は常に平隱でありましたが、其年他に大層心配事が起り非常に心を遣ひました。年末になつて今度は私が熱病に犯かされました故、國許より母を迎へ看護を受けました。最も私は周圍に居る他の人々から非常に親切な介抱を受けましたから、病氣は割合に輕く追々快方に向ひ、翌年の春を迎かへ、二月國許の祖父の病氣と聞きまして母は歸國しました。

其時何となく母を離す心持がいやでございましたが蔽くして居りました。母が去つて一ヶ月許の間病氣は他の方向へ外れまして神經衰弱と變じ、甚しく不眠症を起しました。其れを苦にして毎日泣いて居りました。家人一同はもて餘して百方手を盡してくれましたが、段々衰弱して迚も治る見込はないと思ひ死を覺悟致しました。勿体ないけれども夫は非常に心配して、業務も半廢し寢食を忘るゝ程に私へ盡して呉れました。其厚意を正直に素直に受ればよいのに、其時の私はヒネクレ者でありました。丁度佛樣の御慈悲も全く其通り素直に頂けばよいのでありますに、遠慮をするからいけない事があとで分りました。其時私は夫の厚意他の者の親切なる介抱を手厚くして貰へば貰らう程氣の毒でたまりません、いつを限りと分らぬ病に大勞を心配させ、其內夫の身に障る事でもあつては大變故、餘り永びかぬ內に死にたいと三月下旬には全く死を待て居りました。夫は再び母を迎へると申ますのに、私は亦親の慈悲を受ける事さへ遠慮して好みませんでした。其遠慮とは餘りに親心を察し過ぎて、妙に母へ氣の毒に思ひました。親としては子の病氣と聞ては介抱せずに居られぬであらう、其れ故病初には早速母を呼び看病をして貰ひましたから其れて充分です。今度再た母を呼べば必ず私の死顏を見せねばなりますまい、此窶れた顏を見せるさへ氣の毒なのに、死体迄を見せるは實に忍びぬ事と申して私は承知しませんでした。けれども日一日と弱り ゆき、四月三日の朝はモー死ぬ樣な氣がして、神武天皇祭に當るが難有いと死を待つて居りました。衰弱が前よりだんだん加る事は知れて居りましてせうけれど

も、愈死の迫りたるに夫の驚き一方ならず、周圍に命じて非常の手當をさせました。私は覺悟して居ましたから却てうるさく其れを厭ひましたれば、今母より國許を立つたと云ふ電報が來た、母に逢はぬ前に死んではならぬと夫より嚴かに云ひ渡されました。私は落膽しました。此の變り果てたる有樣を母に見せる事が辛らく、去りとて國を立つた者を止められはせず、私の死んだ後へ着かれたら殘念であらう、直ぐ死顏を見せるより生て居る間に母に逢て死んだら母は滿足するであらうと思ひかへしまして、一生懸命氣を引立てる積りになりましたが、又だん〳〵弱りさうになると見にまして、又母の來る迄と呼び覺まされました。私は折節母と一言聞くのがハッと心に響いて何よりの元藥劑となり、カンフルの注射と共に幾分か精神と肉体とへ注入されました、私は幸に死から救ひ上げられました。

四五日經て四月八日にフト思ひ付きましたは、今度不思議にも一時は助かつたものゝ迚も全治は致すまい、さうしたら兩親はどうてあらう、母を欺いては濟まぬけれとも、佛に歸依した樣を裝つたならば死んだ後で幾分母を慰め母を信仰に入らせる種になるてあらうと、實に私は惡い奴てありました。そこて母に向ひまして今日はお釋迦樣の日です、私は唯こうして毎日〳〵〳〵して居るよりは、毎日御文樣を讀んで聽かせて頂きたいと思ひますと、母は大に悅びまして早速御文樣を探し出して枕邊て讀んてくれました。母は欺かれるとは知りませんから大層お前はよい事に氣が付いた、これは宿善の開發したのであらうと毎日二三度づゝ繰返し讀んてくれました。眞に親の慈悲又其上の親樣の御慈悲は難有ものて、斯樣な惡い私を御見捨てなく却て尙も御導き下された。御陰についだん〳〵と私の方が佛の道へ引入れられて來まして、幾分心を傾ける樣になつてまいりました。母が折々申しますには御前は只自分の病氣ばかりを苦にするが、いくら苦にしても時節がこねば治ほらぬではないか、其れよりは能く心を沈めて病は醫者に任せ、未來は阿彌陀樣にお任かせなさいと。私は其時心の內に成程それに相違ないけれども、未來など分かるものかもう仕方がない、捨身になつて死んだ積りて居ようと思ひましたが、そういう風にいろ〳〵と母の暖かい心て慰めてくれますので、いつとなく薄紙をはぐ樣によい方に向ひまして、病初より全く七ヶ月を經て少しつゝ歩行ができる樣になりましたので、母も大に悅んて歸國しました。母が歸國の前私の爲めに國の菩提所の御住職最上字堂師に他力信仰の要點を伺ひました。其返事に「此心を穿鑿するてはない、此心は自分の心でも自分の思ふ樣になりませぬ、(思へと云ふても思はず、思ふなと云ふても思ふ)あてになりませぬ、あてにならぬ心をねじなほすではない、あてにならぬ、其まんまなぶらず如來に御任かせなさるべし、これを報謝の念佛と云ふ」と書いて御送り下さいました。私は毎日々々其れを味ひましたが、やつぱりねじけた心ですから、其儘御任せできませんてした。しかし、これが大邊に動機となりまして只今は大に感謝して居ります。

其後は轉地をしたり、出來る丈の我儘をさせてもらつて居りましたが、中々急に全快は致しませんて、隨分夫を苦しめ周圍を困まらせました。爲めに今度は夫の方がだん〳〵神經衰弱を起して來まして、同病互に煩悶して居りました。一年余を過きましてから友人の紹介で淺草本願寺の婦人法話會へ行きまして、折ふし參るようになりました。又其後求道學舍に御出になりました宍澤樣より「信仰の餘瀝」と「求道」とを頂き、それから先生の御講話を拜聽しまして、熱心に伺ふ樣になりましたは一昨年の冬頃からかと覺えます。それで以前程佛樣は無いなどゝは思はぬ樣になりまして、何だか分らぬけれども昔から人が信する事故、いつか分る事があらうから分る迄聽て見ようと思ひまして、國許の父にも勸めましたので、其頃から父も段々信する氣になりました。昨年夏頃より佛樣に疑が起つて來まして、どうか其疑が晴らしたいとあせる樣な氣になつてまいりました。

前に戻りますが私の病氣も講話を承る樣になりまして次第に心が落付いて參り、少しの事を余りに氣に懸けぬ樣になりました。丁度病初よりは五年目、只今から申せば一昨年頃からてありました。さうなりますと夫も大に悅びまして、御前は近頃大層樂天的になつたと實に昨年は悅んてくれましたが、私はそれても、まだ自分の足許の罪惡と云ふ事には氣が付きませんて、只佛樣の方ばかり眺めて居りました。

夫は暇があれば毎夜私と散歩するのが例の樣になつて居りました。昨年舊曆八月十三夜も例の如く散歩に出まして月を賞して居ります內、ふと心に浮びましたは近頃佛樣に疑いが起りだしてからは何となく一種異樣に煩悶の氣味がありまして、子供の事から周圍の事迄何だか心配の樣な氣がして居りましたのて、其時急に子供の行末を考へまして、子といふ者は幼少の間は只可愛いばかりてありますが、成人するに從ひ一年增に心配が增して來ると云ふ事に氣付ました。自分はまだ成人した子はありませんから分りませぬが、成人して後もやはり同じ樣にいつまでも心配な者に違ひない、して見ると、私共も親がありますから親は私共が子供の事を心配するよりも、もつと年取つた子のことですから多くの心配をして居るかも知れぬ、吁今迄は子を以て知る親の恩などゝ生意氣に親の恩が分つた積りであつたが、まだ分らなかつた、自分を產んてくれた親の心さへ分らぬ樣な愚な身にて、どうして大慈大悲の佛樣が分る者かあゝ申譯がなかつたと氣が付きまして直ぐに夫に語りましたら、成程そうかも知れぬと申して居りました。それてもまだ佛樣は分りませんてしたが、何だか難有い樣な嬉しい樣なしつかりした樣な氣がして參りました。

其頃はよく親の慈悲について御講話を承りました、其後半月もたちましてかよく覺ねて居りませぬが、或夜寐所へ行きますと、又電氣に觸れた樣に心に感じて參りました。私は何とも云へぬ嬉しい樣な氣がしまして、佛樣の光に包まれた樣な心持になりました。大陽の光線は或る分らぬエーテルなるものゝ振動によりて傳へらるゝと申す如く、佛の惠みは到底人間の力にて解譯のできぬ廣大なる御力に違ひない、大陽の光線さへどこても照すのに、佛の光はエーテルの充ちて居るところではなく、我々の身體の內迄も浸み渡らせて下さるであ

らう、さうすると學者の名くるエーテルだの力だのと說く者も、或佛の光の一部分ではあるまいか、佛の光は十方の微塵世界に充ち滿ちて一切群生海の心にもみち給ひ、草木國土盡く成佛すとありますが、あゝさうか知らんと思ひまして、又直に夫に語りますと、あゝさうかも知れぬ何にしても御前の心にさう感ずるは誠によい事であると申されました。私は誠に嬉しく身の周圍を見まわして、何か佛の惠みに包まれて居るように思はれて悅て眠りました。それから間もなく求道二卷八號の極樂無爲涅槃界を讀みますと實にあり難く、丁度是迄毎日天氣の曇て居たのに漸く晴れかゝつた樣に疑が晴れて氣分が爽かになつて、くりかへし三度程讀みまして誠にさつぱりした氣になりました。それですから私は元氣よく毎日働いて居りました。實に佛樣はいろいろと私を御導き下さいまして、我子の事から親を思はせ、親から佛樣を仰がせ、やつぱりの事で我身の罪惡の深きなどをも知らずして迷へるを思ひ知らせて下されたのでありました。

翌十一月中旬より夫は病魔に侵され次第に增進して來ました。病名は食道癌でしたから食物は漸く通り難くなりますので、互に煩悶をはじめました。友人或は他の醫者の診察をすゝめますれば、醫治に由て效を奏すべきものでないと一言の下に拒絕され、尙其上堅く秘して人に語る事を許しませぬ。私はこれ程苦しい思ひは今迄にありませんでした。夫も私の苦痛を察しまして平常は差支るもんですから日曜講話へ參りますのを餘り好みませんでしたが、今度は私をすゝめて出してくれますので、私も其厚意に負くは却て病氣に障ると存じましては出かけました。そして承て來た私の心持を話しますと悅ぶ樣子でありました。病氣は益增惡しまして治る見込のない事は初めより分かつて居りましたが、十二月下旬よりは誠に甚しくなつてまゐりましたので、如何にも私がたゑられませんから强て靜養をすゝめますれば御前の言は尤もなれども自分も已に重症に罹り居れば、今よりても病蓐に就けば病人として居られるけれども、さうなれば自然煩悶が起て病氣は益重くならう、それよりも自分の樂みと思ふ事をして幾分病氣を忘れて居たい、どうかその點を理解して自分の好む事をさせてくれ、そうして一日でも死を延したらば、御前も幾分慰められようと、病を勉め勇を鼓舞して業務と、或る講義とを勸めて居りました。その丙午も暮れ一月を迎へ七日になりました、けふは日曜なればとてすゝめたてられ私は先生の御宅へ上りました。御門には忌中の札があります、先づ胸潰れて先生と奥樣に御目にかゝり、御子樣の御かくれの事を承り、何とも御慰めの言葉がでませんでした。その時先生に私は悲慘なる黑雲におほはれて居ります、今も御子樣に就て無常を承りながら、まだどうしても佛樣に向てありがたい心が起りませんと申しましたら、先生が歎異鈔第九節を引かれて御諭し下されまして、續て御講話を承り、尙第九節の御話がありました。次の土曜には偶然にも婦人法話會で日曜には亦先生から同じく歎異鈔第九節の御話を承り、大さう樂になりました。其頃昨年末の求道第十號の疑城胎宮懈慢界を讀みまして疑惑の心が恐しくなりました。私はもうきつと佛の境涯へ遣つて頂けるが、私の夫はどうなるか、今の有樣では私より先へ行きさ

うなのに、夫を暗黑界に迷はせて私のみ淨土へ行てはつまらぬと思ひまして、早速夫に向ひまして其事を話しました。簡單に申せばあなたはまだ佛を御信じになりませぬが、今度は病氣のためいつ如何なる場所で突然命の終らんとも限りません、萬一私の居ない處で急變が起つた時は、必ずパッと分りませう、其時です、今日迄の疑を去て心の底から眞實一言感謝の念佛を唱て下さい、さうして私が行く淨土へ先きに行て御待ち下さい、凡夫の私には見えぬけれども迷を離れた境涯からはたとへ幽冥界を距つても必ず見るでせう、あなたがさうして眺めて居て下さると思へば、是から先き何をするにもどんな困難があつてもあなたの目の前で力强う思はれます、此の世てはあなたの前でなければ分りませんが、佛の靈界へ御入りになればいつも私のそばに居て下さるでせう、さうなれば私も少しも淋しくないと思ひます、さうして命數が盡きましたらすぐ私はれろばへ行かれます、御釋迦樣の御喩言に念佛を疑ふものは死んでのち五百歲の間七寶の宮殿に黃金の連鎖を以て繫がれねばならぬとしてあります、實に死て晴れ晴れした境涯が見へず、疑の雲に覆れて居る有樣でせう、此の後私が死た時あなたはやつぱり其暗黑の界に迷つておいてになつてすぐ傍へ行く事ができませんでしたら、私ばかりよい處へ行てもどんなに悲しいか知れません、と申ました。其時夫は餘程心に懲いたものか、默て聞て居りましたが笑ひに紛らして居りました。

又其頃御和讃の「如來大悲の恩德は、身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩德も、骨を碎きても謝すべし」を讀みしてやはり私の今の身の上に味ひ少なからず勇氣が出ました。それ故夫へ向ひまして私も御蔭で滿足ができるようになりました、今后はきつと已前の樣な神經衰弱は起りますまい、健康で是迄の御恩に酬ひる積りです、どうか私の身については心配せずに安心して死て下さい、其頃から私の惱みは輕くなつてまゐりまして、夫もいつとなく病苦も煩悶も薄らぎ大さう機嫌よく、どうせ永くは生られぬからもう樂しく暮さうと申て居ました。さう云ふ風になりまして病氣も少し輕快した樣に見うけられましたが、衰弱は日に加つて來ました。それでも勉めて平常の態度をよそほひ講義をして心を紛らせて居りました。私はケ樣に覺悟を致しましても夫の身が氣の毒でたまりません、或日他の御方の事で先生の御宅へ上りました時、始めて夫の病狀を打ち明けて心の苦悶を先生に訴へました、先生はいろ〳〵と私を御諭し下さいまして、さういふ意志の强い人は一度淸澤先生の信念を見せてどうか信仰をすゝめる樣にと仰つて、政敎時報の百三號を一冊頂いてまゐりました。其夜淸澤先生の信念を讀みまして幾分夫が先生に似た處がありますので、私は一晩泣きまして話しました。それでも私へは信仰をすゝめる爲め必ず日曜を覺えて居て、私が忘れた風をして傍に居らうとしましても出してくれました。其后二月も去り日々羸瘦してまゐりまして、三月十四日聲音も嗄れ歩行も困難になる迄講義を續け外科手術迄致しまして、夜に入て歸宅しまして翌日から起てなくなりました。精神上は少しも不安の樣樣もなく、病苦も比較的少なく、日々安らかに就寢して居り

まして、五日目の十九日遂に往生致しました。夫の信仰狀態はどうでありましたか傍に居ても內心は分りませんでしたが、若い時から常に其日一日に滿足して悅て居りました。病氣が起りましてからは一時煩悶しましたが、一月已后は非常に滿足して悅て死にましたから、兎に角或る一種の信仰はあつた樣に思ひます。平素の行爲に就きましても迷ひと云ふ事は少なかつたと思ひます。實に曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流轉して來ました迷妄の夢がさめて本覺の都へ歸たかのように思はれます。

其夜より私は夫の寢床のあとへ床を敷いて寢まして、每夜母と御慈悲を悅ては眠りました。二三週程を經まして或夜母に求道を讀み聞かせて居りました。其時の御和讃に

超世の悲願聞きしより
我等は生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど
心は淨土に住み遊ぶ。
煩惱に眼さへられて
攝取の光明みされども
大悲ものうき事なくて
常に我身を照すなり。

此御和讃を讀みかけますと、一々是迄の經過にあてはまりまして聲が出せなくなり、難有さにむせび入りました。實に超世の願力によりて肉體は生死の凡夫なれども、心は淨土へ遊ばせて頂く事ができました。煩惱の眼には見へませんでも大慈の光明は常に我身を照して下さる、まあ何とありがたい事てせう。丁度一月偶然にも私が夫へ話しました事と一致しましたので、今は夫も佛樣の御傍で私を眺めて居られると思へば泣かずには居られませんでした。次に

無碍光の利益より
威德廣大の信を得て
必ず煩惱の氷解け
即菩提の水となる。

又それを讀みますと今度は夫の事に就て難有なりました。前申述べました通り、信仰上の事は口には申ませんでしたが無碍光の利益よりいつとなく私が御聞かせに預ることを悅ぶようになりまして、私が信心を頂くようになりましてからは夫の煩惱の氷もダンダン菩提の水と溶けゆき、廣大なる信を得させて頂いた事と嬉しくなりました。信仰已外の眼から見れば夫は私の安神狀態を見て思ひ殘す事はないと安心した位に思はれませうが、私はそんな輕々しい安心の仕方では永の病中あと戻りがして、あれ程迄には悅べなかつたでせうから、必ず內心に確信して居たと思ひました。

是迄の經路を考へますれば不思議にも思つた事がヒシヒシと符合しましたから、只不可思議と讃歎致すより外はありません。こうなりまして過去を追想して見ますと、實に耻かしくあります。佛樣はどうかして私に人間は罪惡の塊であると云ふ事を知らせようとして、初めは祖父母を透して御緣を御結び下され、妹の死去に無常を御知せ下され、又病氣のために煩悶を起させ、種々御導き下された。最後に夫の身を透して佛の靈境を御示し下されました。先日も世間悉く是れ虛假

唯佛のみ是眞實と承りましたが、私の身の上に就きましては火宅無常の世界はよろづの事皆もてそらごとたわごとまことあるなきに、唯念佛のみぞまことにてはしますと仰せられた通り、幼年より祖母の敎訓、病中夫から諭された事を思ひましては、其眞實を悅び常に我身を守ると思ふて居ますから、いつも淋しい感じは少しも起りませず、只管粉骨碎身せめてもの御恩報しと感謝して居ります。

* * *

心身脫落

藤澤　乙夫

謹啓、過日御滯京中は種々御高敎を賜り、殊に御繁忙中遠路を不厭遊林會講話に御出演被下奉鳴謝候、扨此度不思議の佛緣により我慢の角を折り、日夕歡喜罷在候次第一寸愚兄を通じて感謝申上置候も、此儘默して御禮申述べずば不相濟事とて、一筆感謝の意を奉捧候、實は一昨年愚兄が先生に依り不計信仰生活に入られ申候折、直樣飯京仕候好機を幸ひ就て聽く所有之候處、全く宿善未到乎、聊か靈感を獲たる思致候ひしも、其後は全然疑惑の雲霧に閉ぢられ居候、

元來小生は愚兄と同樣の境遇にて、從て精神狀態も殆んど同一の徑路を辿り來り、煩悶の原因は家庭及修學の問題に歸せられ可申候、幼にして母親を失ひ不規律なる家庭に養育せられ、中學五年にて當寺に入家致し、次て最も學業多忙とする高等學校より大學に進み、學術の蘊奧を研究せんと一大抱負を持ちて勉勵罷在候身が、傍ら家事負擔の命を蒙り、加之學資不充分にて志望に不叶、搗てゝ加へて家庭內の風波荒々しく、養子の身の上は層一層精神を勞する事甚しく、尙又さりとて親族朋友に對しては義務を欠くべからざるの當然にて候、這般の境遇にありて精神上の根據となり慰安となるは幼少より養成せられし聊の宗敎的觀念、及び諸先輩の訓誡或は學術上より得る愉快位にて、此等の物より築き上げたる安立は極めて危險にて、到底永續致さざるは明白に候、殊に信仰問題に就きては中學時代より其必要なる事、及其效果の偉大なる事等を念頭に掛居、從つて說敎講話等も可成傾聽し、先づ信仰は獲得せり、此問題は解決せりと獨斷致置候、然るに歲月と共に欲望も增大し、業務益繁劇を加ふるに及び、漸次自己の境遇に不滿を抱き、或は願望の種々の方面にて滿足し得さるにつけ、自己の運命の果敢なきを歎息し、從つてそろ〳〵家人を怨恨し、碌々相談笑せず、かく當方より胸壁を設くれば他人の一擧一動が冷淡に思はれ來るは、疑心暗鬼をさすの道理に候、而して此苦境を打明けて慰藉し呉るゝ親友を得ざるをかこちては恐に不堪、かくて漸次胸中は不平不滿を增加し、延きて社會の事物一として不愉快の種ならざるは無し、而して他人の行爲に是非の批評を加へつゝ、外面巧言令色を以て接し、終に自己一身に籠城して自ら慰安を求めて、其日送に致居候、尤も此間信仰を離れ佛を忘れしに非す、時々宗敎書類も閱讀し、人にも信念談を話し掛け、先生の煩悶の顚末を知悉し、我が精神狀態の大に似たるものあるよと折節氣付居、信仰の餘瀝も懺悔錄も、眼を通し居り、自分は罪

惡に苦めり、如斯者を救濟し給ふは佛陀の慈悲なりと、心中にて勝手に決定致居候か抑暗黑の根本にて、念佛者はかゝる苦境に處して奮闘してこそ眞の價値ある生活と云ふべしと他迄我慢を張り、強ひて此慈悲にて煩悶の頭を叩き付け、辛うして姑息的療法を加居候も、內心の奥底を探れば確實なる根底無之候へば、其安心も實際苦痛にして何程難有き宗教の文言を記誦するも一向味無之次第にて、全く宗教を惡用致居候事を自白致候、且又煩悶と云ふも先生の如く激烈なる極度迄到らず、或は世事に妨げられ打忘るゝ日も不少候儘、此煩悶を捕へて徹頭徹尾根本的解決を試みんともせず、要するに飽然として其日送の有樣にて、前記年月を經過致居候は、願れは誠に横着千萬の所存にて、同時に此經驗が非常なる强緣に外ならざりしは恐懼身の置處無之候、然るに本月二日議事堂に於ける先生の演說、人生を捨てゝ佛に歸せよ、人生に片足を入れ乍ら佛陀に依賴せんとするも不可なり、其人生を捨つるとは當方より捨つるに非ず、一點佛の慈悲が心底に透徹せば捨てさるを得さる也との示敎を聽き、身心戰慄大に感する所有之、次て四日遊林會席上信仰と活動及ひ五日求道會の信仰談相聽致候ひしに、奇妙にも此三四の講話に依り何時の間にか小生が精神狀態は一大變動を起し候、早朝眼覺むれば不知不識唱名出て來り何となく愉快に不堪候も、淺ましや猶多少の理屈を列へて所謂我あつかいを繰返し、且つ斯かる歡樂は果して永續するや否やを疑居候に、五日夜求道九號熟讀、先づ質疑四答の冒頭より讀みもて行くに三段、思ふて居るのは信じて居るのではない云云の句にて內心大に響く所有之、且つ例月に異りて此度の求道は明瞭に解せらるものよと不思議の思有之、依りて先生に押顏の上懺悔致度存居候も其意を不遂空しく御別れ仕候次第に候、越えて八日求道會例會開かれ席上自分の感の懺悔致候處、傍の卒濱田君其所也其の味也とて一言一句毫も通ぜざる事無し、終に語盡きて互に破顏大笑致候に、其笑の間に亦無限の味よまれ、愈佛の大慈大悲の廣大無限なるを欽仰し歡喜の思を增加致候、其後歡異鈔御一代聞書秀存百話等を押讀するに、片言隻語皆ひし〳〵胸底に撒せざるはなく、且明瞭ならざるは無し、益々佛智不思議に驚入候、洵に危險極まる人生上に名譽地位財寶學問衣食等を以て自己を造り上け、之を中心として一切外他の物を是非善惡し、得々として省みず、而も道は易き近きにありて佛は吾等の我慢の落つる隙を窺ひて、日夜四方八面よりやるせなき慈愛を注入せんと待ち焦れ給ふを、些末の事に拘泥して自ら拒絕し居るは耻しき限に候、實に如來の御恩は到底門外漢の窺知する能はざる味にて、よくも汚穢不淨の人間界にかく迄結構なる法の存在するものよ、言はんに語なく味はんに感官なく、而も火宅無常の世界に充滿して無碍なりとは只管沈默するの外なく、かゝる自白文は皆嘘言にて、最早煩悶の種なりし學業も家庭も春風駘蕩の感有之、從來暗誦したる聖敎の文言は茲に至りて生々として總て深長の意義を有し來り候て、尙其上に押讀すれは日々に新なる味を得、愈々廣大なる佛敎を仰き、日頃着眼點の誤謬なりしを記入居候、又佛法以外社會の事々物々皆悉く幽深の意味を感得せられ、歡喜惜く能はず候、其に就けても飽迄執念深き凡夫の根性は、其歡喜

の心に眼を奥れ、其思の失せ申候時は我一念云何あらんと、怪み始め實際世話の燒ける我儘息子なるには、ほと〳〵親も持餘し居られ候らん。されは目今は此歡喜の念も佛に任せ奉り、只唱名の中に極めて平安なる日暮を致居候。

小さかしき智慧や理窟で分つたと決めた心ぞげに淺ましき。たすかると思ふた心は打ちとけて只ほれ〳〵と仰くとうとさ。

永雨は何時の間にやらふり止んで風はふけども日本晴かな。

かばかりも廣き海とは知らざりき風のまに〳〵今日の船出よ。

佛には飾り言はなかりけり仰まことと受くる外なし。

うそぢやものうそがまことと知られたら南無阿彌陀佛の外はあらじな。

つかまんと力む赤子は疲れ果てすや〳〵寢る親の膝かな。

言葉なし汲めども汲めども盡きせざる泉の底やさぞ深からむ。

張りつめし我慢は折れて安らかに慈光の中に御名唱へつゝ。

生きかへる恐こそあれ生殺し月夜に闇の出るものかは。

闇夜には已れも人も闇かるを我のみあかく思ふ愚かさ。

石つぶを住家とぞせし根なし草水の流に大海に入る。

不思議とは闇から闇の旅人を光の國に導く佛智。

離しては落つるならむと子は思ひ早く離せと待つ親心。

人にしてふさふ語はあらめやはそれは不思議と云ふぞ外なき。

喜びも暢氣も今は賴まじな南無阿彌陀佛と唱へこそすれ。

不思議をば喜ぶ心も打任せ六字の杖に浮世渡らん。

先は御禮迄敬具

* * * *

機關車上の感謝

渡邊萬吉

近角先生閣下、閣下の求道學舍の聽講者並に求道誌の愛讀者諸君は、皆な上流社會の學者達の如く見へ候も、茲に私の如き下界の一人にして、亦求道誌の道友則ち閣下の所謂未見の知己たるの光榮を有し居る者に候。

閣下、私は現世界の火の車乘り、即ち鐵道機關運轉手にて寒風凜烈身を刺すの夕も、炎熱燒くが如きの日も、此の天職に身を委ね居る者に候、大幸にも求道誌に依て多大の慰藉を蒙り、寸暇を得れば之を愛讀するを以て唯一の樂みと致し居候。あまり難有さのあまり昨秋頃より自分の心的狀態の一端を先生の下まで不遜をも顧みず御報知申さんと思ひ居候も、元來無學無文の私、每號押讀する如き見事の告白は元よりてぎず、今日までひかへ居候、然るに頃日ふと思ひ出せしは、私今年正月郷里の父母の下へ送りし懺悔文の一節を此に記して文盲なる自分をも顧みず御繁忙なる先生の元へ、私今日の心狀の一班を御報知申す事と致候、誠に恐縮の至り偏に御高恕奉願上候。

征路平和の初歳空前の目出度皇國の春と相成候、茲に兒の一身に付て右に百倍したる目出度初春なるを報ずべく、喜び勇んでつたなく筆もて左に申述べ候。

兒の御膝下を離れてより今日まで既に十年、日々夜々に火の車乘りか天職にて候ひし、而して來世には亦是れに百千倍したる地獄の火車に乘り移り、無量永劫泣くべかりし此者か、如何なる大悲の御不思議力にや此度未來は彌陀淨土の黄金蓮臺に乘り移り、無量永劫樂みを得さしていただく冥加にあまりし大仕合の身となりしを御報知申上るのであります。

父母の大恩を蒙りて此世へ生らかして貰ひ、今春にて三十年、而も今日まで御兩親の眞の御恩は明らかに分からなかつたです、申上るも誠に恐多ひ次第であります、兒は何等の大幸にや幼少より佛前に拜すべく、御名號を稱すべく、家庭教訓を蒙る事の深かつたので、今日まで斯く遠く膝下を離れて殆んど十餘年、其間ほそぼそながら佛法の志繼續し、常に御法席を尋ねては聽聞しました、(常に同僚の目を忍び御寺の門を曲るにも同僚に認められはせぬかと心配しては參詣しました、)是れ偏に御兩親の御感化、彌陀大悲の御手廻しと深く感謝します、然るに耻しや御慈悲はなか〳〵貰へなかつたです、眞の安心は出來なかつたです、併し平常の心持ちはどうかといへば御信心を得たつもりて居たです、彌陀の廣大なる誓願をも承知し、自分の大罪惡なる事も承知して居たつもり、無論他力の御本願なる事も承知はして居たつもりでした、然るに耻しや今にもと死の命を切り詰めて見ると、どうも物たらない心地、さきがはつきりしなかつたです、その筈です、未だ大慈悲を眞とに自分のものに頂戴しなかつたのですもの、實を申せば御阿彌陀樣を遠くにばかり求めて居ました、久遠劫より此の大惡人を救ふために、日夜此身に付きどうして被下たる切なる親心を、眞に今まで氣付かなかつた事の申譯なや、兒の膝下に居た頃、日常に父上より御法話を御聽かせに預りました、就中御阿彌陀樣の御本願を信ずるばかりだ、阿彌陀樣の救ふとあるをほんとにする一ッだと聞かせて貰て居りなから、私は常に其信ずるとは已れ自身で信ずるにばかりかゝりはてゝ居ました事の申譯なや、それだから臨終を切りつめて見ると、眞實の安心か出來かねたのです、なぜなれば御他力に背ひてゐるのですもの、自分で信じ樣自分で安心し樣とばかり思慮して居たのですもの、此の奴をやくにたゝせようとして居たのですもの、嘘今日願て見ると慚汗冬なを衣を絞る思ひであります。

今度こそはにくるに上手な私も大慈大悲に追ひつめられて、と〻と攝取の御手にとらはれました、迚ても我か力にては信ぜられぬたのまれぬ此者なれはなり、願行揃ふた機法一體の南無阿彌陀佛を御廻向くたされたのだもの、御和讃に

如來ノ作願ヲタツヌレハ、
苦惱ノ有情ヲステスシテ、
廻向ヲ首トシタマイテ、
大悲心ヲハ成就セリ。

實にはや一から十までそつくりとくだされもので、大手ひろげて御待設けの御淨土へまいらしていたゞくといふ事は今こそ明かに知らして貰ひました、あゝ信ぜずにはおられませぬ、たのまずにはれられませぬ、すがらずにはれられませぬ。今日まで此小さな胸であなたの無限の大慈悲をはからつて居ました事の勿体なや、今ははや此罪惡深重の身を大膽にもそつくりと投げ出して、御阿彌陀樣に任かせました、御開山は彌陀の五却思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりとおほせられたとある、實に此萬吉一人のためにいかばかり御苦勞くだされましたか、今日まで眞に知らざりしとは誠に慚愧の次第であります。

蓮如さまでしたかの御歌に、

父母の御恩を深く思ふべし
彌陀たのむ身をそだてたまへば

と、ほんに今こそ泌み〳〵と味れます、今更の樣に大慈大悲の親樣の御恩と父母皇國の御恩とか一時に知らして貰ひました。嘘今一年早く死したなら今日までの父母の御恩を無にし、久遠劫よりの彌陀御救濟の御手をおしのけて無間地獄に陷ち、再び火車の苦を受くべかりし此奴が、大願强力の御手回しにて、今はゝやにくるにげられずおちたくもおちる穴がなくなりました、嗚呼樂しい春であります。

難有い春であります、

火の車乘り〳〵淨土の旅行かな
樂しさや念佛の聲で火の車ひき

是か私の今後の境遇であります、日々の日ぐらしであります、あまり嬉しさのあまり、禿筆に鞭うちて心のまゝをかざりなくあら〳〵申述べた次第であります、祖母兩親兄上も何卒嬉んでください、兩姉にも知らしてください、きかんぼの萬吉も今まではたれよりも信心を得てゐる樣な顔して居なから、實はまだ御慈悲をほんまに貰はなかつたが、今度はと〻と眞實の御救濟のあみにとらわれたと申してください、近日中に例の求道と外に正月の讀みもの、則ち信仰の餘瀝及懺悔錄送りますから。御よろこびの助線にもと熟讀拜誦してください、何卒夜分なりと一家炬燵を圍んで是非讀んでください、一昧の御安心を御廻向に預りて始めて眞の一家族であります、

卅九年正月　　渡邊萬吉九拜

御一同樣

先生閣下まずざつと右の如き亂文であります、之にて私の心狀を御推察ください、右の文中「火の車乘り〳〵淨土の旅行かな」とは自分の今日の境遇に付て思ひ浮んだまゝを書いたのでありますが、能々思へば私の物質上の境遇のみでなく亦精神の境遇もやはり日夜に念々刻々火車の日暮してある事を懺悔の至りに堪へません、併し此まゝなから日一日と御淨土へ向て旅じをさして貰ふて居ると思へば、何たる仕合せの身でありましよ、いかなる廣大なる御慈悲でありましよ。

私は日々機關車に乘りて勤務中、多くの客車多くの貨車を牽引運轉する毎に、色々の事を思ひ出さして貰て喜んで居ります、亦數多乘客中或は多くの手荷物を持ち、或は數人の子供衆を伴ふて居る婦人、或は不幸なる盲人もあり、或は片足な

る者もある、或は紳士あり老人あり、然も同一時刻に同一停車場に着く右の有様を見る毎に、

願力無窮ニマシマセハ罪業深重モオモカラス
佛智無邊ニマシマセハ散亂放逸モステラレス

等の御和讃を思ひ出し之を默誦しては喜んで居ります、或は又右の乘客中紳士も老人も等しく瀛車の學理は少しも知らぬであろ、否な之を知るとも客車に乘るに付ては毫も其要をなさないのである、なぞといろんな事を念ひ勿體ないが絶對他力の御味ひを喜ばして貰ふて居ります、又此頃も瀛車が全速力にて或る村里の踏切を通過せんとする數間にて村人數人其踏切を正に横斷すべく進んで來る、依て私は注意瀛笛を吹鳴して居る、然も村人更に悠々と進んで來る、勿論瀛車の近づけるを知らぬのである、(斯る場合は日常にある) 既に前きなる人は足を線路にかけた、瀛車ははや數尺にせまつた、私は焦心右手にて瀛笛を吹鳴し、左手にては列車を停めるべく手配をなしてゐる間一髪に、前きなる一人始めて瀛笛を聽きしものゝ如く、一驚瀛車を一瞥するや急速後へと一歩を引く、瀛車はスーと通過した、私はほつと一息汗を拭きました、彼れ村人も定めて冷汗を拭いたでありましよ、此時に私は泌み〳〵と求道誌の御講話を思ひ出し喜き教訓を得しを喜びました、彼の村人か遠き先きから私の注意瀛笛は無論耳へは入て居つたのである、然もど只だ聞えてゐるのみて、更に自身に向ての警告であると聞こゐぬのである、故に歩一歩と死地に進んでれる、警笛は益々鳴り響いてゐる、僅に一歩にして始めて我身に向ての警告であると氣が付いたのである、嗚あやういかな、今一歩遲く警笛を聽いたなら身を粉摧せられたのである、

先月第四號求道誌の「歎異鈔」御講義中『我身は』とは信仰問題の眼目である」との御ことば「及び本月の五號求道講話中「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と決定するのです、罪惡生死は人の上て無い、自分の上てある、人も自分も人間はみんなさうだ抔と思ふてる間は眞に決定する事は出來ぬのです、」等の御ことばを思ひ浮べ誠に感謝の涙を禁じえなかつたです、又本年一號の求道雜誌表紙の觀音樣の御像を拜せしに付て大に感泣せし事があります、それは第一號誌を手にするや、先づ始めに表像を拜見した、是は南都藥師寺の觀音樣の御像てある事を卷首を讀んて知た、それと妻にも聞かせて共に拜したそして私は此の御像が全身の御すがたと拜して居た、而て一兩日の後ちふと机側にありし該雜誌を取るべく顧瞥せし時此表像に目がとまり、今まて全身の御すがたと思ひ居りし像が、何ど圖らん肩より上の御像てありしとは、此時始めて明らかに知れた、喜びのあまり妻にも其由を聞かせしところ妻は既に左樣承知して居たに、あなたは今までどう見てれりましたと笑はれました、此時私が再び以前の如く全身の御像に見樣と思へども如何に見ても以前の樣に見る事が出來ぬ、茲に於て甚た慶喜の涙にむせびました、去年の春頃までは永年の間御やるせない御慈悲をどう聽ひて居りしか、今日は再び以前の樣に一たび疑かつて見たいと思ふても疑かふて見る事は出來なくなりました、是が則ち大慈父の御まことまる貰ひせししるしかと天を仰き地に俯して感謝の念佛を稱へました、南无阿彌陀佛々々々、長々しく亂筆を以て不得要領なる文を綴り御閲覽を煩し候段、恐惶至極に候、實は既に四五月頃認め候も斯の如きもの御高覽を煩すの罪甚た大なるを慮ひ、今日までひかへ居候も、大悲冥護の下に月々多大なる先生の御導きを蒙り歡喜の餘り、遂に先生の御慈心に甘へ大無禮をも忘れ、只今御覽に供せし次第に候、他日罄咳に接するの機もあらば深く此の不遜の大罪を謝すべく、只管其期の至るを待ち居申候、時下寒氣漸く烈し、御化導のため幸に御自愛あらん事を祈り奉り候、頓首

おほよそ大信心海を按すれば、貴賤緇素をえらばず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論せず、行にあらず、善にあらず、頓にあらず、漸にあらず、定にあらず、散にあらず、正觀にあらず、邪觀にあらず、有念にあらず、无念にあらず、尋常にあらず、臨終にあらず、多念にあらず、一念にあらず。唯これ不可思議不可稱不可說の信樂なり。 (信卷)

書義

歎異鈔

近角常觀

第二章

親鸞のおきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛をまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄にれつる業にてやはんべるらん、總じてもつて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。

是れ實に親鸞聖人の御胸中において、一點の私なく一毫のはからひなく、たゞ〳〵如來の御はからひにうちまかせて死するも生くるも浮ぶも沈むもたゞ〳〵大悲の御おほしめしにしたがひたまひたるまゝを有体に打あけておしめし下されたのである。世界廣しといへどもかくの如き屑托のない安心なる信仰は又と見出すことは出來ません。私は今迄歎異鈔を講ずること幾十回なるをしらぬほどでありますがこの聖人の御自書に對しては何とも敷衍して見やうがありませぬ、もと〳〵聖人が、御心のまゝを何のはからひもなく、ありのまゝ

におしめし下されたおことばなれば、我等も亦何のはからひもなくおことば通りありのまゝにいたゞかねばならぬ、ゆゑにたゞそのおことばどほりすらり〳〵と繰りかへし〳〵拜讀して何のとゞこほりもなく其まゝにいたゞくのが何よりよろしい、こと〳〵しく言葉を加へて講義をするは却つて瑕なき玉に傷つくるの恐れがあります、さりとて何かいはねば其味を申すことさへ出來ねばせめてのことに私がだん〳〵味はゝせていたゞきました懺悔話なりともいたしませう。

親鸞におきては唯念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせを蒙ふむりて信ずるより外に別の仔細なきなり。此一言は聖人が信仰の骨髓であります。抑も聖人御年二十九歳のとき求道の御こゝろやるせなく、六角堂へ參籠のかへりみち四條の橋の上に聖覺法印に出あひ、其勸にしたがひて即日源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまゐりたまひしとき、南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本人間たゞたのむべきは阿彌陀如來の撰擇本願念佛の一つであると眞宗紹隆の大祖聖人ことに宗の淵源をつくし、敎の理致を極めて、おはなしなされも言葉の下にあゝ名號の不思議なるかな誓願の不思議なるかな、かくのごとき煩惱具足の愚禿親鸞いかでか難思の弘誓にあらずんば、生死の苦海を渡るべきと打まかされたる心のありさまが即ち親鸞においてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信ずるより外に別の仔細なきなり、といへる御言葉となつたのである、そして其御不思議に打まかせて、御師匠のおほせの如く何等のはからひもなき心持が、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、又地獄にうまるゝ業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなりといはれたのである。實に此信仰は二十九歳の御時なり、九十年の終りに至るまで、少しも渝らざるのみならず、晩年に至りて益々法然聖人の義なきを義とすといふ御敎化を蒙ふりて、唯々師匠のおほせどほりと一毛一厘の私なき心地になられたのが、自然におことばの上にあらはれて、たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからずさふらふとおほせられたのである。

扨かくの如く何のはからひもなく口に浮ぶにまかせて申されたるおことばなれども一宗の肝要敎行信證の骨目ことに行信の相關信心の精髓は此一節につくされてあります。そこで私が此「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうぶりて信ずる他に別の仔細なきなり」と、いふ一句を味はゝしてもらふた順序について話して見ませう、先づ私が、第一に氣を盡けさしてもらひました點は、信ずるに他に別の仔細なきなりといへる、處でありました、信ずる他に別の仔細なきなりといへるは如何にも力強き信仰である。如何にも簡潔なる信仰である、いかにも直截なる確信である、實に信仰は其自身が目的である、何故信ずるかといふ理窟はない。信ぜようとおもふて信じたのでもない、信ぜずにをられぬから信ずるのである。信じて淨土に生るゝ爲でもない。信じて地獄をまぬがるゝ爲でもない、地獄へ落ちようが極樂へまゐらふが結果のいかんを眼中におくのではない。例へ地獄に落ちて百千萬劫苦しむとも更に何の

後悔もない。たゞ〳〵法然聖人の勸めたまふ南无阿彌陀佛の一つは疑ふ事は出來ぬとの御心である。實にかくのごとき確固不拔の信仰は又と世界に見るべからず恰かも大盤石の金輪奈落の底よりはえぬきたるが如し、我を生かさうと我を殺さうと地獄へやらうと極樂へやらうとたゞ上人の御こゝろのまゝなり、恰も罪人が斷頭臺に登りて生死を氣にとめずまた赤子の慈母の胸中に何の心配もなくしてねむる樣なものである、かくと、かく私は「信ずるより外に別の仔細なきなり」といふ點に力を入れて聖人が信心爲本の力強き御信心を味はして貰ひました。

偖第二に味はせて頂きましたは「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」といふ點に力を入れて頂きました、なるほど「信ずるよりほかに別の仔細なり」といふ力強き信仰が眼目なれど、なぜかく信せねばならぬ樣になつたか、もとより自分でりきみて信ぜねばならぬと足に力を入れるのではない、足の下の地盤が確かなれば力を入れずとも安心して足を踏み下すが如く、信するより外に別の仔細なきなりといふ金剛信の起るは「たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」といふ地盤があるからである、何の氣もなく念佛を稱へつゝあるが實に念佛は吾人の思議すべからざる佛陀の御力である、抑々經文を書寫讀誦し陀羅尼を持ちて各々其の佛菩薩を念するが如き皆それ〳〵の佛の力を身に感得するの道である、是を名けて行といふ、行といふは全體人間が其身を苦しめる功をいふのではない佛の力の人間の上にあらはれ來ることである、諸の自力の行ですら目的とする所は佛陀の力である、これが全體佛敎の本義である、特に今南無阿彌陀佛の大行はあらゆる行、あらゆる法の中より選擇せられたる絶對無碍の一道である、そして彌陀佛は三世十方の諸佛の根本である、其佛の御力が念佛である、其約束が本願である、かくの如き大なる彌陀佛の御力を以て助けたまふ他力である、此最勝眞妙不可稱不可說不可思議の功德ある念佛、誓願一佛乘の御救がある以上は信ぜずに居られぬのである、信すると言へば非凡なことのやうなれども、決して變りたることではない、信ぜねばならぬ力があるからである否其の力が人間の上に下りて來たのが即ち信である、聖人が如來の加威力に由るかゆへに宣ふ如く信心は如來の力を加へらるゝのである、如來の御催にあづかりて念佛も自然に申さるゝのである、かくの如く念佛といふ點に氣がつきて初めて古來より難關として通り難き行信の關係が理窟はなれて自然に解らして頂きました全體念佛爲本信心爲本といふ法然上人と親鸞聖人の關係が久しく了解出來なんだ、宗學を研究したときに法然上人の時代は行の代である故に實は信が本意なれど行行相對て當時に順じて說かれたのであるといふ說明をきゝて、中心服することが出來なんだ、かく言へば如何にも親鸞聖人はよい樣であるが、法然上人一代の敎が何んだか方便のやうに聞こえて信ぜられぬ、しからば法然上人は念佛を主としたまひ、親鸞聖人は信心を主としたまひたといふならば、兩方圓滿なる調和は六ケしい、法然上人がよいものとすれば何んとなく親鸞聖人は廢師自立のやうに思はれる、親鸞聖人をよしとすれば何んとなく法然上人は猶自力的であつて强て同じといふのはこじ

つけの機に感じたことがありました、これが何故かといふに鸞竟行といひ信といひ其形式ばかり見て其根本たる他力の味が分からぬからである、すでに述べたるが如く念佛は我等の行ではない如來の大行である、法然上人は其選擇本願念佛を喜び稱へたまひたのである、夫を聞きて信ずるより外に別の次第なき也と親鸞聖人が喜びたまひたのである、僅かに此一句の間に行信の關係が自然に盡きてあります。

かく味はして貰へば、念佛といふも、彌陀に助けられるといふも、よき人の仰せといふも結局一つである本願や名號、名號や本願、そして其誓願一佛乘をしらして下さつた法然上人は其儘智慧の念佛の權化、大勢至菩薩の御導きである、此に至りて佛も法も僧も別でない、唯一つである、法然上人の御教化夫自身が即ち如來の大慈大悲の南無阿彌陀佛である、夫が即ち本願招喚の勅命である、それゆへ選擇集一部を行住中に收めたまひたのである、かく力强き本願他力を仰ぎてみれば今まで力を入れて味はして貰ふた信は自然にあらはれ來りて信ずるより外に別の仔細なき也と何の苦もなく頂かざるを得ぬやうになつた。

かく第一は信に力を入れ、第二には念佛に力を入れ、人にも語り、自らも喜びつゝあるとき、フトしたことより第三にまた〳〵喜ばせていたゞき御緣に遇ひました、夫は外でもありませぬ、昨年事の緣ありて東京監獄にをきて死刑囚を敎誨することになりましたが、其中に清水彌三次郎といふものが大層憂鬱に沈み運動もせず、食事も進まぬ有樣であつたが、何時の間にか御慈悲を喜ふの身となりまして非常に心が開け

念佛を稱へつゝありました、そこで一日私が其者に心持を尋ねましたら、御蔭で心の蓮華が咲きました、實に此世では身の出入にまで人樣を煩はさねばならぬ樣な罪深きものなれど佛樣の御力で南無阿彌陀佛〳〵と稱へさして頂きて、次の世には自由な身になして頂くことが難有事でございますと、そこで私が何の氣もなくをまいはその樣に念佛を喜んで居るが念佛のわけは分つて居るのかと尋ねしに、どうしまして、私はいろはさい書けぬ敎育のなきものなればどうして念佛の譯など分りまするものか、かく稱へて居てありがたい念佛、譯か分れば定めて面白いことでもございましうが、譯も分らぬど唯南無阿彌陀佛〳〵と稱へさしていたゞきて命終れば樂なる身にして下さるのが難有ございまするとの答へた、其答を聞くや否や直覺的に歎異鈔の此御言葉に私の心の中に氣附かせて頂きたした、ア、「親鸞にをきてはただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰をかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり、」如何にもそうである彼は念佛が何である信ずるが何である一言も言はぬ、否言ふことを知らぬ、されど彼はたしかに唯念佛して彌陀にたすけられると聞かして貰ふた通りに信して念佛をしつゝあるのである、そうじや、そうじや、念佛して助けられると云ふ仰せを信するといへば仰の如く何の計もなく唯念佛しつゝあることである、夫がすなはち信じたのである、全体所信の行じやの能行じやと云ふ區別があるものが、念佛して助けられると仰せらるゝまに〳〵仰き信じ念佛するだけのことじや、「大行といふは無碍光如來の名を稱ふる也」其仰せを信じたありさまは仰の通り念佛して喜

喜ぶの外はない、即ち有名なる冠頭の和讃の味はこゝである、彌陀の名號となへつゝ信心まことにうる人である、彼彌三次郎は念佛の何たる、信心の何たるを知らざるも實に彌陀の名號となへつゝ信心まことにうる人である、念佛はまことに淨土に生るゝたねにでやはんべるらんまた地獄におつる業にてやはんべるらん總じてもて存知せざるなり、實に彌三次郎こそ眞に總じてもて存知せぬのである、われらは存知せぬといひつゝ大に存知しつゝある心持である存知せぬ譯を存知したつもりで說明をなしつゝある、「よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、おほそらごとのかたちなり。是非しらぬ邪正もわかぬことのみなり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、」實に慙愧懺愧に堪へぬ次第であります。

* * *

無量壽佛大光明を放ちて普く一切諸佛の世界を照し給ふ。金剛圍山、須彌山王、大小の諸山、一切諸有皆同一色なり。譬へば刼水の世界に彌滿するや、其中の萬物沈沒して現ぜず、混滉浩汗として唯大水を見るが如し、彼佛の光明も亦復是の如し、聲聞菩薩一切の光明皆悉く隱蔽して、唯佛光の明顯赫なるを見るが如し。《大無量壽經》

* * *

十六年前の冬高等學校にありける時、宗祖聖人の舊跡を巡拜せんとて旅しけるとき、古賀驛にて除夜を過し、正月の二日に稻田に詣てける昔を思ひ出で、當時の舊作を記憶のまゝ志るしぬ。

常觀

* * *

天地如逆旅。光陰如客馳。旅窓歲云暮。感深古人詞。
學途幾百折。東西猶迷岐。日暮前程遠。驚馬步遲遲。
賴有一寸在。白玉涅不緇。深嶽不自售。千古任人知。
疎狂吾忘我。慷慨漫憂時。否當吾忘我。亦忘吾翁衰。
吾翁年五十。髮深雨鬢霜。山河三百里。遙々見心悲。
一夜萬感聚。旅窓訴向誰。欹枕灑暗淚。剔燈賦古詩。
詩成歌然起。擊壺揮吟毫。一曲寒雲破。蕭颯天風吹。
曲歌萬物靜。茫々天地彌。唯有太虛裡。孤月小於眉。

詣稻田草庵

此地宗師轉法輪。凜然猶覺有威神。風霜一夜山房夢。
咫尺分明拜現身。

嘆　詠

千葉之一夜

左千夫

丙午の晩秋、下つふさなる千葉寺村に瀬川博士の築々亭を訪ふ其夜氣靜に月澄めり、主客茶を愛して清談刻を忘る、遂に一宿して短歌數章をとゞむ。

千葉の野の海を見おろす南岨松をよろしくいほりせりけり

秋清く海晴れぬれは端居より里原ごしにいざりする見ゆ

月やよけむ雁やよけむと眺めつゝ千葉が起れる海山おもほゆ

いにしへの人の植ゑけむ岨の松年古りて今世に逢へりけり

事繁く都に住めば週くる日の一日を茲に野をや樂む

茶を好む人のいほりは庭作り巧みを無しに飽かすぞありける

立ち圍ふ庭の植杉植くぬぎ檜も女竹も山をさながら

虫も鳴かず風も動かぬ天地の靜けきよるを茶に物語る

天地の寄合ふ如き夜くだちに朱けにさし出づる月讀の神

しみさぶる杉の木立ゆ月讀の影さす寒くさ夜更にけり

光

甲之

藻に伏す魚よ
ともしき光
寒き水
な行き水は
汝が身を刺さむ。

藻に伏す魚よ
底ひの波の
なごり波
あああざやけし
動くはいのち。

いづちよ光
ただ一筋に
しが光
漲る光
藻伏東鮒

深夜

八風

吹きすさびたる木枯和ぎ、
雪に更けゆく、靜けき夜を、
なほいねもせず、狹き室に、
細き燈火ひとり目守る。

目守れるまゝに、その燈火、
いつしか見ねずなり來る時、
わが身の在りや無しや、知らず、
さめたる心即ち我。

目にこそ見ざれ、ものことゞ、
耳こそ聞かね、こゑことゞ、
見、聞くを何の遮るあらず。

大きく、小さし、廣がる空間、
長く、短し、續ける時間。
萬は一つ、一つ、萬。

すさび

八　風

八雲立つ出雲に神の集はせるあとをひたふる秋の雨かも（秋雨四首）

八百萬神集はせる出雲にも雨はふれりやこの秋雨は

秋雨はいたくなふりそ刈りほしゝ稻流れぬと告げこむもうし

雨ふるに風さへあれば窓の戸も遂に開かず日は暮れにけり

朝風に銀杏黃葉散る坂を今日もみ寺へ登らすらんか（憶祖父四首）

旅にして我を思はゞみ佛のみ名唱へよとのたまひし祖父

草枕旅立つ我を門に出てゝ送りたまひし面かげに立つ

會ふ毎に是ぞ終りとき〻つゝも終りとならで年は經にけり

＊　＊　＊　＊

おり〳〵草

志都兒

久保田柿人北山の萩刈見に來る由いひこされしに日を重ねて待てども來らず、即九月八日葉書を出す、その端に書き添へける歌一首

今日明日に君來ますずば萩刈るとこもりし人等山下るべし

十一日同子より手紙來る、兄死去の爲め迚も今年は萩刈駄目に相成り遺憾千萬に存じ候と、終りに「年久に戀ひて思へる北山の萩刈小屋に寢るらくは何時」の歌あり

かへし二首

秋の野にしき鳴く虫の百千々に思ひみだれて現氣なけむ

こほろぎのさびし汝が音を聞きつゝも君なげくらむ秋の夜すがを

十九日に日原無隈がおとづれぬ、二十日二人入倉山に遊ぶ歌二首

ほ芒をかりの枕にいねて聞けば吾が居るそばゆ虫鳴きさかる

かげろひの斜め夕照りなく虫の汝に別れて歸りともなし

十一月九日平福百穗氏醫科の湯に來れりとて便りありければ、夜を冒して湯に赴く、一見舊の如く快談深更に及ぶ、翌日乞はるゝまゝ寫生帖に書きつけしうた

北山の里の少女ら夜刈すと田に唄ふ聲何と聞きつや

北山は寒くしあれやまだ刈らぬ穗並の上にみ雪積るも

白妙の雪のみけしのよそをひに都の人を迎る八ヶね

北山の夜刈る籌の八千かゞりみ空を焦しほてりほてるも

立科のアヅサ黃葉は末枯れて見る目さびしく時すぎにけり

出湯戀ひ又來ん年は野に山に秋の八千草咲く時をこね

廿三日平福子と共に甲州に入り、岡ちさとを訪ふ、梁頭日館せりと聞く

諏訪村の栗のもみぢと照りにほふ妹背二人は言にいひ難し

妹を見ば思ひなぐさむ君をみば妹が思ひはいやなぐさむらん

紹介

◉修養時感

故清澤滿之先生著

故清澤先生が明治精神界の指導者として、殊に我が絕對他力信仰の先覺として吾人の上に遺し給ひし偉大なる德化は、苟も心靈の問題に心懸ある人の既に普く知悉する處、吾人今更云爲するの要を見ず。先生の友人澤柳政太郎氏嘗て先生の性格を談じて曰く「師に就て研究すべきもの二。その意思の强固にして知行合一せる余未だ君の如きを見ず、今の世自力の宗を開き得べくんば盡し君を措て他に求む可らざるなり。然るに此人にして絕對他力の信仰に入る、是れ研究すべきもの〻一也。次に君の深遠なる學識と、强固なる意志とを以て、學界若くは實業界に投じたらんには其成功疑ふべからず。然に君は超然として自ら佛門に入る。名利を棄ること君の如にして、而も其終焉に先つの日自ら日乘に記して時に猶名利の念禁じ難きものありといふ。是れ修養の一日も忽にす可からざるを晦ゆるものにして是又研究翫味すべきもの〻二ならずや云々」と。以て未知の讀者は先生の高風を推し給ふに足らむ。今本書は先生が晩年に於て無量壽社諸君が心靈修養の資に供せんが爲めに執筆寄稿せられたるもの、其一版は既に先生終焉の歲卅六年九月に於て發行せられたり。項を別つ事七十六、第一「內心の決定」より最後「他力の救濟」に到り、固より組織的著作にあらずと雖も、先生日常の實驗感想は遺憾なく此間に發露せられ、眼のあたり先生に咫尺して其高敎に接ずるの思あり。更に添ふるに附錄「信の成立」「正信と迷信」「信仰の進步」の三篇、及び先生の小照一葉を以てし、今又第四版の刊行に當りて「平等觀」「宗敎と倫理との相關」との二篇を增補せらる、吾人は切に世の修養家諸君の必讀を薦ふ。（發行所東京本郷森江分店改正定價金參拾五錢）

◉泡鳴詩集

岩野泡鳴氏作

題名の如く新體詩人岩野泡鳴子の詩集にして、一昨年公にせられたる『夕潮』及び昨年刊行の『悲戀戀歌』を再版に臨みて一冊に纏められたるものなり。斯界の消息に絲遠き吾人は此稿の述作に對し多くを言ふを能はずと雖も、近時に至りて泡

鳴子の名聲滿く文壇に盤踞なる如く覺ゆるは如何にや。傳へ聞く泡鳴子初めて作詩に志してより既に十餘年、孜々として一日の倦む事なく、熱誠驚く可きものありと、果して然りとせば吾人は虛飾に流れ易き文壇の輩に於て熱誠氏の如き詩人の出たるを賀せざる能はざるなり。蓋し詩は人生の眞實なり、唯眞實の人のみ獨り之を能くしうべし。吾が國詩界の前途猶ほ混沌たる今の時、吾人は幸に自愛加餐大成の日を期せられん事を祈る。本書は分れて上卷「夕潮」下卷「愚戀愚歌」の二卷となる。而して上卷には「女護海島」「世外の獨白」三篇「海邊雜吟」十七篇「靜思」十篇外に史詩「豐太閤」二篇を收め、下卷には「三界獨白」三篇「銀事」三篇「旭日吟」「銀恙」五篇「短曲」廿一篇を收む、猶ほ附錄として劇詩「脫營兵」一篇を添えたり。凡そ三百三十八頁・吾人は未に辯論の機を得されば全體に渡りて紹介する能はずと雖も、先づ氣づきたるは氏が用語の一字一句充分なる鍛錬を經て決して空しく使用しあらざる點にあり。蓋し是れ氏が今の詩壇に一歩を抽きんづる所なるべきか。猶ほ常に冗長を過げて裝飾よりも本質を賞ぶ風全體に著しきは是亦大に吾人の快とする處なり。詩に志あるの士は是非に一本を購はる可し（發行所東京京橋金尾文淵堂定價五拾錢）

◉夢の華　與謝野晶子著

本書は新派歌人として名高き與謝野晶子女史の短歌集なり。近作の短歌三百餘首を收む。晶子一派の新歌風に對しては世猶ほ區々の議論ありと雖も、女史が兎にも角にも歌壇近來の一奇才たるに到りては今や一般に認定せられたるが如し。偖て本集に於て最も著しきは女史が思想の漸く進歩の境に進みて痛く冥想的傾向を示し、從て格調亦極めて平穩、昔日奔放の跡を留めざるに至りし事是なり。蓋しこれ女史が詩僧の彌圓熟老熟の境に進して今や正に渾然として定まらんとするものか。然れ共冥想的なれば技巧に陷り易く、技巧に陷る時は詩の生命を遺失し易し。吾人が本書を手にして時に新語の古今集を讀む感を覺ゆるも亦已を得ざる所か。吾人は寧ろ女史が「亂れ髪」時代の詩風を愛し、更に一層を加へて昔日の奔騰に邁進せられんことを切望して止まざるなり。今本集中より世人に推賞せらるゝもの二三を錄出す。

雲ゆきて櫻の上に塔かけよ戀しき國をおもかげに見む。

地はひとつ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日の昇る時。

久方の天のいくさの火箭おちて香ひするなり罌粟の花原。

美しき夕くれなゐの中に見ぬ戀ひしき船の大き布柱。

表裝挿畫亦頗る優美にして能く內容に叶ふ。好詩家は一本を左右に供へざる可らず（發行所東京京橋區金尾文淵堂、定價八十錢）

◉病間錄批評集

讀んで亟の如く、網島梁川氏著「病間錄」に對する世評を蒐集したるものなり。「病間錄」の如何は吾人既に昨冬の本誌上たゞて紹介し置きぬ。惠ある人は就きて見給ふ可し。（發行所同上文淵堂、定價貳拾五錢）

◉小說世界的大競走　石川半山著

作者の自序に曰く。久しく東洋の一孤島であつた所の我日本も今や世界の高潮に乘じて世界の日本となつた、國民の意氣も亦從來の偏狹なる島國的より脫化しして更に濶大なる世界的とならなくてはならぬ——國民をして世界の形勢に注意せしめ、世界が如何に日本人を待遇せる乎、現に海外に出でたる日本人が如何なる行動をなせる乎、今後の日本人は如何なる意氣を要し、如何なる生活をなすことを要し、特に今後海外に出づる日本人は如何なる覺悟を要する乎を學ばしむるは今日の日本の急務で有る、我邦世界一週の旅行より歸り來て、此の「世界的大競走」の一書を著はす者亦聊か此等の時勢の要急に應ぜんとする微衷より出でたるに外ならぬ。云々」

已上の精神を以て每日新聞記者石川半山氏の物せられたる小說なり。頁數殆んと五百五十頁、頁を分つ事百二十六、大要は現時知名の紳士を以て組織せる日東倶樂部の一員にして絕倫の數學的頭腦を有し紀律を以て命とせる基督教信者理學士秋月期なる者、同じく倶樂部の一員にして久しく歐米に滯在し歐米通を以て自任せる青年貴族伯爵森澤廣行なる者と英京倫敦への航路の長短を爭ひ、秋月は歐洲線を主張し、森澤は米國線を主張し、其極互に三十萬圓を賭けて自ら競爭を試みるといふ筋にして即ち世界大競爭の名の來れる所以なり。然れ共本篇は其上篇なれば競爭の結果は見る可らず、篇中の人物は是れ悉く現代の名士にして大臣あり、學者あり、社會黨員あり、新聞記者あり、音通を以て暗示したれば讀者は讀過の中に其人を推察しうべく、時には諷刺滑稽の妙に動かされて破顏微笑禁じがたきものあるべし。但し小說家ならぬ氏の所作なれば之を眞地目の小說と思うて繙かんには誤あるべし。家庭好恰の讀物たるを失はず（發行所同上金尾文淵堂、定價六拾錢）

時報

京都行

教學商議會のために京都にゆける傍、人の請はるゝまに〳〵大悲の恩德を仰ぎたてまつりし、聊かしるさんか

一日布敎講習所にして話しぬ、布敎は目的として學ぶべきものにあらず、心の中に御佛のまことを仰がは、いかでか默して止み得べきこれ自然の布敎なり、かつてわれ五年前歸朝しけるとき傳道學校を起せといふ希望もありき、されどわれ求道學舍を起しぬ、傳道と求道と、きくもの先づ其態度を異にす。これ布敎傳道に志すものゝ心に銘すべき點なり、されどこれ決して布傳のみにつきて爾るにあらず、何事も信仰に達して自然に來るべきものなり、

二日京都議事堂にて南條齋藤平松伊藤上杉諸師と共に公開演說に臨みぬ、聽衆は帝國大學高等學校を初めとして公私立及び宗敎學校の學生多かりき、予は「人生と信仰」の要點を辯じて、一たび人生を棄つるにあらずんば絕對の信仰に入るあたはずといふ

三日天華香洞にて西田君を初めとして多くの求法修道の人と語りぬ、世にも稀なる集合にてありき、僧あり商人あり學生あり老婆あり小女あり雲水あり、信仰を以て人生に活動する妙味につきて語りぬ、次に看病婦學校の報恩講にて聖人の人格につきて讃嘆したてまつりぬ、聖人の御同朋主義は如來の御惠の下に平等なりといふ信仰より來るものなりされば其謙遜は一面には如來の威力を加へらるゝ也といふ確信を來す。されば之を如來の代官といふ謙遜語が我等より仰げば無意識の確信にして法然上人に對する一點の私なきはやがて法然上人と同一他力の信心たる所以也

四日阿刀田君宅にて學生小集會にて京都修學中の懷舊談を爲して、唯佛の御惠みを信じて進むべきを勸む次に薗田君と共に今回帝國大學生の組織に成りし遊林會に出席す予は信仰と活動につきて話す、前議事堂演說の半面にして人生をすてゝ信仰に入りたるものは必ず信仰を以て人生に働き得べきを述ぶ

五日京都求道會の催により淳風會館にて信仰談を爲す花田君の談あり、予は自己信仰の實驗を初めとして、特に本典を初めとして、眞宗聖敎の文字につきて實驗的の無限の靈光を蒙れることを告白す、佛敎大學の學生諸君堂に滿ち、頗る心を傾けて十二分の領解を得しは最も感謝に堪へざる所也、

六日掬月君宅に黑田君の追悼會を行ふ感謝欄に記するが如し、掬月君母堂求道會に對する反情が却緣となりて絕對の信仰に入られしを告白せらる、語る者、聽く者涕泣嗚咽大悲の善巧を感謝す、

* * *

▲求道學舍日曜講話題、

世諦即眞諦（十一月廿五日）

磯長廟下の所感（十二月九日）

信仰談話會

理想と信仰（十二月十六日）

▲第二　求道會講話題

感謝と力（十一月廿四日）
日本の原始佛教（十二月八日）
大乘相應地（十二月十五日）

求道會館設立喜捨金受領報告（第十七回）

一金貳圓也　熊本　長尾かず子殿
一金貳圓也　若松　和泉鐵二郎殿
一金參圓也　本郷　松下要子殿
一金壹圓也　越中　木下清弌殿
一金五拾錢也　福岡　原久吉殿

小計金六圓五拾錢

通計金貳千貳百五拾圓參拾八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候
茲に謹んで奉感謝候也

22465

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也

昨年已來。聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祜と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹陰を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし、此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て眉焦の急に充てむと欲す、幸に篤實なる先輩の指導に從ひ忠實なる親友の賛助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく。其不便を感ず事一日の事にあらず、而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むることを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調查し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ。協力賛助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十九年十二月

發起者　近角常觀

宗教界唯一の日刊新聞

中外日報　毎號六頁

紙代、郵送費共
一ケ月　三十一錢
半ケ年　一圓九十錢
一ケ年　三圓六十錢

創業第十一年に入り、既に二千號（九月二十二日）を發行す教界に於ける當代知名の文士論客は擧げて我紙上に筆を振ひ光彩常に陸離として蘭菊美を競ふの偉觀を呈す。

京都粟田口三條上　中外日報社（特電九八九番）

明年一月一日發行

宗教及哲學之研究

無盡燈

心靈及時潮之指針

豫告

第拾貳卷第壹號

定價——壹部十錢——半年五十錢——壹年壹圓——郵税不要

穩健老實の歩武を以て、**十一の長星霜**を進み來り、茲に謹んで佛陀の冥祐と讀者の加護とを謝し、併せて**吾人の希望**を告ぐ。**今や**時代の思潮は一心靈の問題に傾注せり、されど未だ曉光仄めくの下夜の暗黑未だ去りやらで、幾多鬼魅魍魎の蠢めける概なしと雖も、吾人茲に見る所ありて、來るべき年の無盡燈は卷頭先づ**「社說」**を掲げて現代の光を放ち、以て國民の適歸する所を示さんとす。**「研究」**には益々究理を勉め史實を明にし、而もそは理智の研鑽と該博の識見による所あれば**「編纂」**に於ては、博識多養**「古今の人物」**を觀察批評すべし**「修養」**には佛陀絶對の味はひ、茲に勇快の意氣大道に靈の糧を、奇警の眼光を得て、**「時論」**には言論と時事に對する忌憚なき評論を試み時に自然人事の**「感興」**に打たれず筆を馳せて琴瑟の音を起てんとす。**讀者**乞ふ暫く之を待て!!!

發行所　東京巢鴨眞宗大學　**無盡燈社**

（日座四二六八）

近角常觀著（第八版）

信仰之餘瀝

定價拾五錢
郵税貳錢

近角常觀著（求道秋季號）

人生と信仰

定價貳拾錢
郵税壹錢

近角常觀校訂

冠頭 **歎異鈔**

一册郵税共七錢（定價五錢郵税二錢）但三册までは郵税貳錢

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

近角常觀著（第三版出來）

懺悔錄

定價貳拾錢
郵税貳錢

發行所　東京市本郷區春木町二丁目二十一番地　森江分店

賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十九年十一月二十七日印刷
明治三十九年十二月一日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所

東京市神田區神保町
大賣捌所　東京堂
同　本郷區千駄木町
同　文明堂

前號要目

求道

◎信仰の質疑に答ふ

感謝

◎萬里同感◎未見之友◎恩賜◎無爲自然

◎唯佛名あるのみ

講話

◎信仰は威力也　近角　常觀

聖傳

◎デヤータカ釋尊傳眞實カ偽て　渡邊　安治

告白

◎清らかなる一生

◎入信歡喜　杉崎　大愚

◎慈母の哀愍佛陀の攝受　藤村　三次

講義

◎歡異鈔第二章　近角　常觀

吟詠

◎曉露光《長詩》　左千夫

◎秋の歌《短歌》　甲之

◎藻屑《同上》　志都兒

紹介

◎陽明學新論◎印度文明史◎佛陀の聖訓等

時報

◎福島縣傳道◎熊本市傳道等

求道第三卷第拾號　明治三十一年十一月廿六日第三種郵便物認可　明治三十九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）